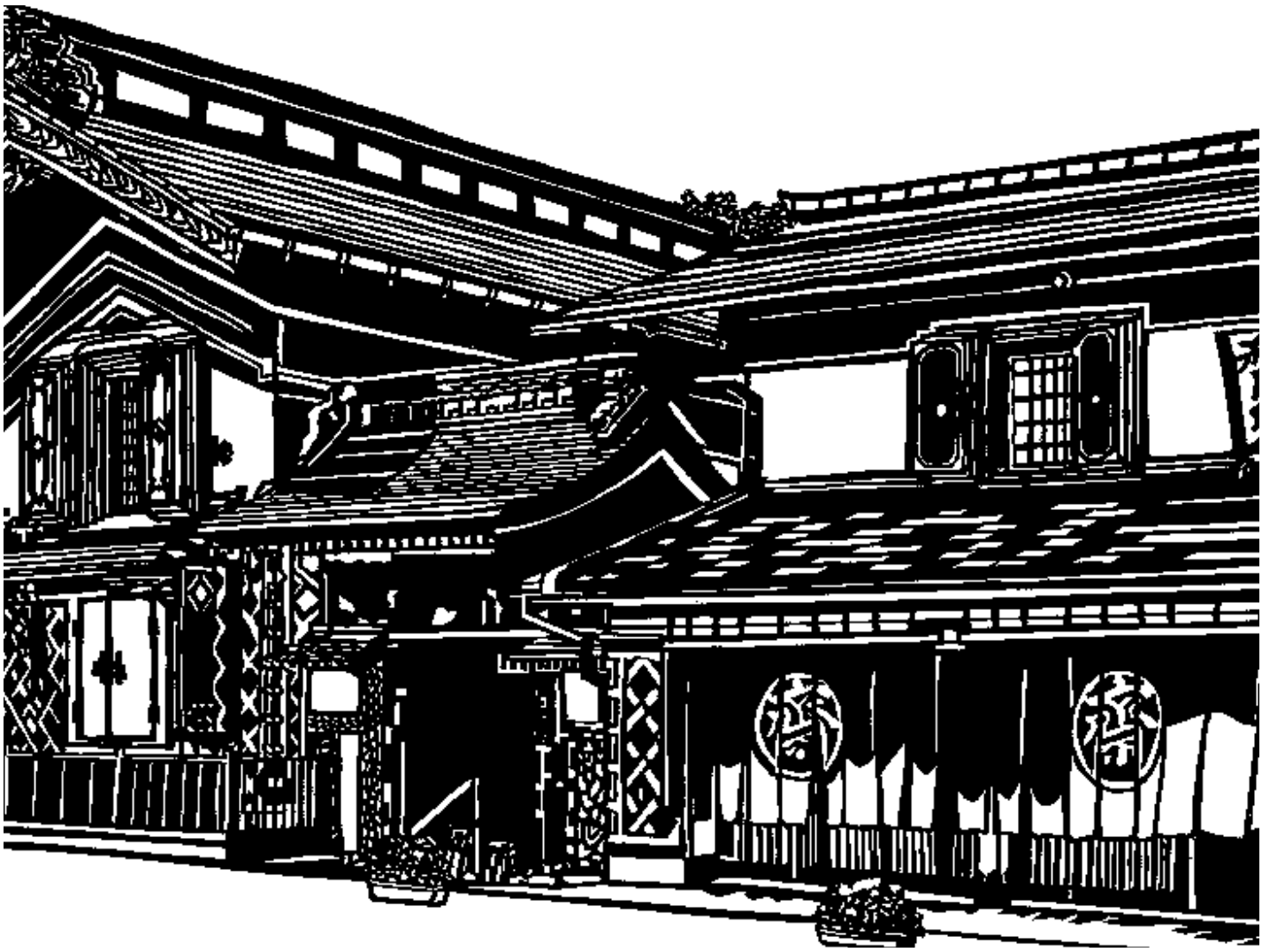
KYOTO UNIVERSITY OF EDUCATION

No. 113

2004年3月25日 発行

KYOKYO

特集　法人化後の京都教育大学



京都教育大学

ACCREDITED

表紙「懐かしき　ふるさとの家？」
　附属桃山中学校３年
　　齋藤　奈都美

　実を言うと、これは福島県白石市東南の丸森町にある、江戸時代から昭和初期にかけての豪商、齋藤家の「斎理屋敷」という建物です。
　ちなみに我が齋藤家のふるさとの家ではありませんので念のため。
暖簾や看板にある「齋」の文字に引き付けられ、何かずっと以前から知っていたような不思議な気分でした。
　そんなわけで切り絵の題材はこれしかない！とすんなり決定しました。
　しかし、実際の作業は簡単なものではありませんでした。
　頭のてっぺんから足の先まで全身を使って進めた切り絵が完成した時は、感動のあまり思わず叫んでしまった私でした。
　写真とは一味違う温かさを感じてもらえたら嬉しいです。

(財)大学基準協会
認定マーク

このマークは，大学基準協会の定める大学基準に適合した大学が使用できるマークです。

CONTENTS

■ 表紙 ■　附属桃山中学校3年　齋藤　奈都美

平成15年度 卒業生告辞

	学長	村田　隆紀	2

特集

法人化に向けて	将来構想委員会委員長	小寺　正一	4

トピックス

「解体新書」初版本が図書館書庫で見つかる	附属図書館長	寺田　光世	10

留学生の声

A Generous Educational System　寛容な教育制度	教員研修留学生	Lilibeth Velez Rivera	12

研究余滴

私の「なんで、なんでだろう」	理学科教授	生島　隆治	14

京都今昔物語

	家政科教授	加地　芳子	17

海外見聞録

英国に住んで	産業技術科学科教授	関根　文太郎	19

京都学内探訪

養護学校へ、来てみませんか	附属養護学校副校長	小竹　健一	21

附属学校園だより

親と学校が一緒になって、子どもを守る。	附属桃山小学校副校長	川端　建治	23
京都小学校が変わりました	附属京都小学校副校長	多田　光利	24
「MET 全体発表会」の開催	附属桃山中学校副校長	多羅間　拓也	25
タイ国訪問	附属京都中学校副校長	橋本　雅子	26
土曜日に園開放	附属幼稚園副園長	川端　智江	27
スーパーサイエンスハイスクールとレクチャーコンサート	附属高等学校副校長	斉藤　正治	28
椎茸菌の根付け	附属養護学校副校長	小竹　健一	29

非常勤講師から

今こそ包括的な環境学を ～環境学を志す学生へ～	社会科学科非常勤講師	今井　秀樹	30
スポーツ栄養学から始まった素敵な出会い	体育学科非常勤講師	寺田　雅子	31

退職・転任職員挨拶

定年退職を迎えるにあたって	副学長	手島　光司	32
ああ　しんどかった	理学科教授	生島　隆治	33
感謝	体育学科教授	野原　弘嗣	33
皆様ありがとうございました。	家政科教授	加地　芳子	34
奉職 40 年を振り返って	教務課専門職員	渡部鐵太郎	34
定年を迎えて	附属養護学校教務助手	小谷　卯一	35
転任の挨拶	産業技術科学科教授	古谷　博史	35
転任の御挨拶	理学科教授	小磯　深幸	36

原稿募集・編集後記

	地域交流・広報委員会委員長	小寺　正一	37

特集

法人化に向けて

将来構想委員会
委員長　小寺　正一

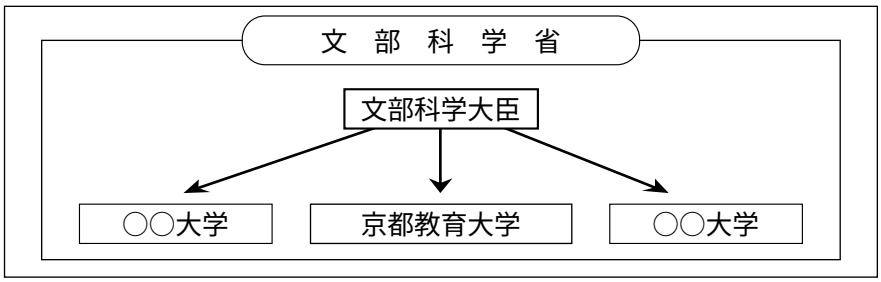
昨年七月に「国立大学法人法」が成立し、十月に施行されました。そのため、全国の国立大学は本年四月一日から一斉に「法人」となります。
今回は、国立大学の法人化によって京都教育大学がどのように変わるのかについて簡単に紹介します。

1　大学法人化とは？

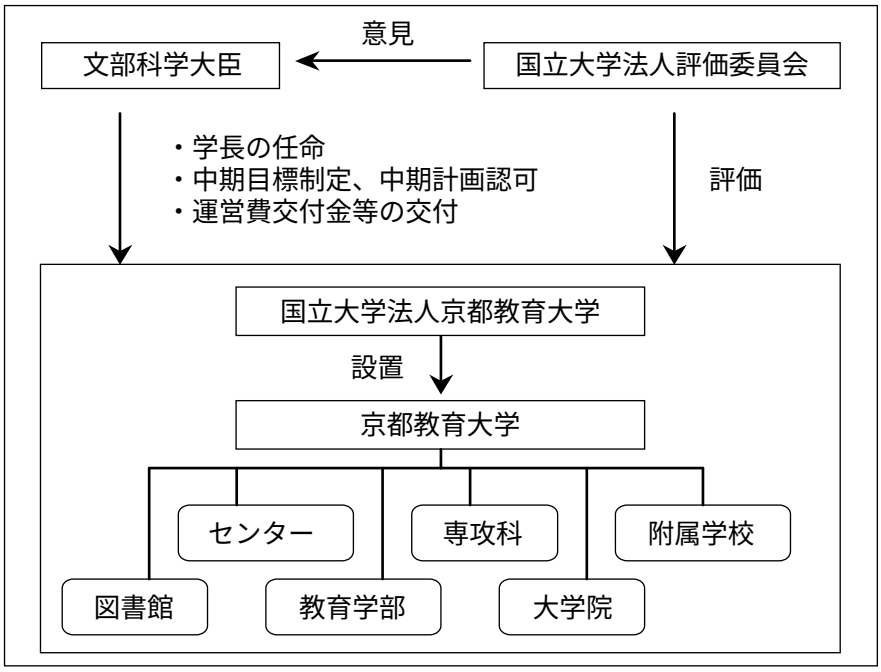
これまで国立大学は、国立大学設置法にもとづいて、文部科学省が設置し、文部科学大臣が所轄するものとされていました。いわば国立大学は国の行政組織の一部であり、その運営に関する最終的な責任は直接に文部科学大臣にありました。しかしこの基本的な構図は、国立大学法人化法によって大きく変わります。

四月から、国立大学は国の行政機関ではなくなります。新たに大学ごとに八九の「国立大学法人」が設立され、各法人がそれぞれの「国立大学」を設置して、自らの責任において主体的に経営と運営にあたることになります。本学でいえば、四月から「国立大学法人京都教育大学」が発足し、これが教育研究機関である「京都教育大学」を設置し、運営します。

またこれにともない、これまで「国家公務員」であった大学の教員や職員は、「国立大学法人の職員」へと身分が変わります。



（図 1）現在の国と大学の関係



（図 2）法人化後の国と法人・大学の関係

（1）国と法人との関わり

このように大学は国が直接に設置する機関ではなくなりますので、国と法人・大学との関わり方も従来とは大きく変わります。それが明確にあらわれるのは、たとえば大学の財政についてです。これまでは国立大学は国によって設置されていたので、学生が納める授業料や入学料は一度、国庫に納付され、あらためて国庫から教職員の人件費や物件費など大学運営に必要な経費が支出されていました。しかし法人化により、法人の財政も各法人ごとに収入・支出が完結する形をとります。本学でいえば、教職員の人件費約四〇億円や物件費約九億円などの大学運営経費約五〇億

円が支出で、これに対して授業料・入学料や科学研究費補助金等の外部資金、それ以外の雑収入など直接的な自己収入約十二億円と（不足分として）国から交付される資金（運営費交付金）約三八億円が法人の収入です。

したがって、法人は独自に自己収入を高める努力をすることもできます。たとえば外部からの研究資金の獲得、また企業などと連携した事業の展開やベンチャーの設立なども可能です。ただし大学や学部の教育研究の分野によって、こうしたことがやりやすい所とそうでない所とがあります。おそらく本学のような教員養成系大学は後者に属すると思います。

もちろん収入を増やすために一番簡単なのは授業料を上げることですが、国は現在の授業料の額を標準額とし、標準額以上にする場合でもその上限は十%までと定めています。また、そもそも少子化の進行によって「大学が学生を選ぶ」のでなく「学生が大学を選ぶ」という傾向が今後ますます強まる中で、他大学よりも高い学費を設定して、それでも受験生を集める自信があるという大学はそれほど多くはないでしょう。

さらに予算の使い方も、これまでとは違います。

従来は国から支出されていた大学の予算の多くは、大学が自由に使えるわけではなく、その使い方が最初から決められていました。たとえば、大学運営のための経費の大部分は、どのような事業に、どのような内訳で用いなければならないかが最初から指定された形で交付されています。また教職員の人件費も、国家公務員の給与表により自動的に算出されたものです。したがって、大学自身の裁量のはいる余地は予算のごく一部にかぎられていました。これに対して法人化後は、大学運営の経費、つまり授業料などの自己収入と運営費交付金を法人がどのように使うかは、大枠でのくくりはあるものの、基本的に各法人にまかされます。たとえば職員の給与についても、国家公務員の給与表は適用されなくなるので、法人ごとに独自の給与表や給与システムを設定することになります。

このように各法人は、運営費をどのように執行するかの予算計画をそれぞれに立て、法人の責任の下に法人の運営と大学の経営をおこないます。従来であれば、大学が新規に新たな事業をおこなおうとする場合、まず事業の計画を文部科学省に提出し、それが認められ、予算をつけてもらわなければ、その事業を開始することはできませんでした。しかし法人化後は、法人がその事業が必要であると判断すれば、独自に実施することができます。もちろん予算の総枠には限りがありますので、その際には予算全体の中からどのようにその事業の経費を捻出するかを考えねばなりません。いわば法人は、大学の特色や個性をどこにおくか、どのような機能や部門に重点をおくか、社会に対して何をアピールするか、つまり大学経営に関する方針や戦略を明確にして大学運営をしていかねばならないのです。

このことを明確に表しているのが、中期目標・中期計画です。

（2）中期目標・中期計画

法人化後の法人・大学の運営は、六年間を基本的な単位として動いていきます。平成十六年四月から二十二年三月までが、その第一期です。そして、法人がこの六年の間で何をめざすのか、その基本的な方向や方針を明確にしたものが各法人の「中期目標」です。

中期目標とは「六年間において国立大学法人等が達成すべき業務運営に関する目標」です。どのように教育研究の質を高めるか、どのように大学運営の改善をはかるか、財務をどのようにするか、改善のための点検・評価と情報公開の仕組みをどうするかなどについて、これまでのように横並びではなく、法人ごとに個性と工夫をいかして立てます。

ただし、「国立大学は、『法律』つまり『国の意思』で設置されている大学なので、そこで行われる教育研究や必要な経費については、国が最終的な責任をもたなければいけない」（文部科学省ＨＰより）という理由から、各法人が作成した中期目標の原案についての（次にふれる）「国立大学法人評価委員会」の意見を聞いた上で、最終的に文部科学大臣が中期目標を定め、各法人に示すという形をとります。

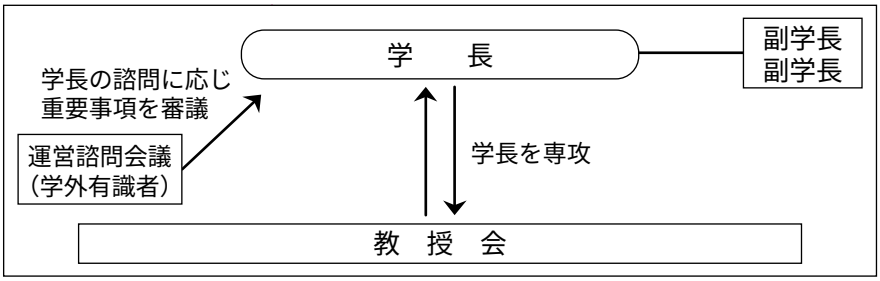
さらに、こうした各法人の中期目標の達成のために法人がどのような措置を講じるのかの具体的プランを示したものが「中期計画」です。こちらは各法人が作成し、文部科学大臣の認可を受けるという形をとります。また、この計画を年度ごとにどのように実現していくかに関する「年度計画」も法人は毎年定めることになります。

なお、国立大学法人京都教育大学の中期目標・中期計画の素案は大学のホーム・ページにのせてありますので、是非ご覧ください。また国立大学法人すべての中期目標・中期計画の素案も、文部科学省の

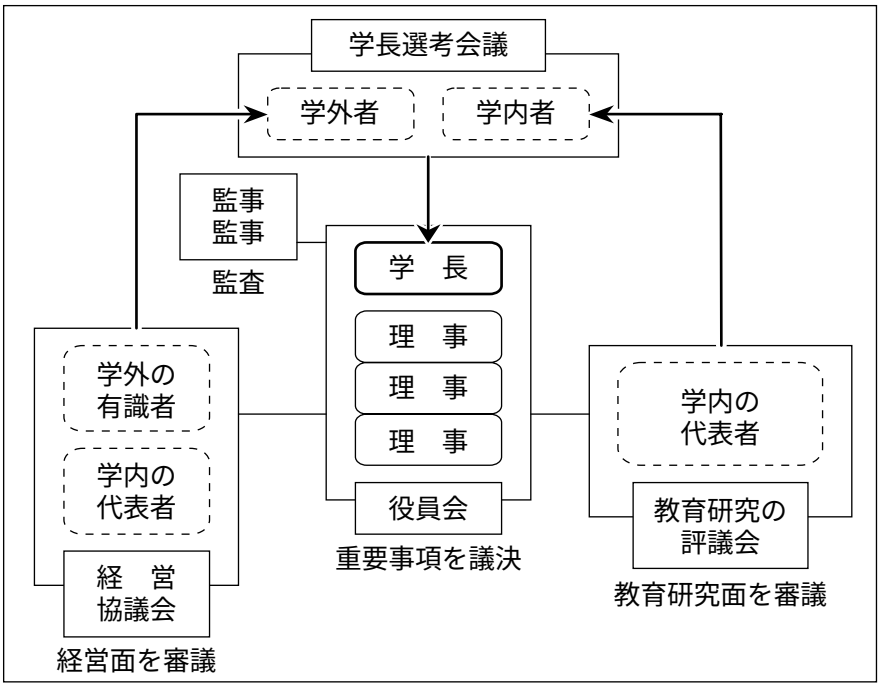
ホーム・ページで見ることができます。

（3）大学の評価

これまで見てきたように、大学は国の行政機関から離れて法人が設置するものとなり、また財政の方式が変更され、大学経営も中期目標・中期計画にもとづいておこなうようになるということは、全体としてみれば、大学の管理方法が「事前チェック方式」から「事後チェック方式」へと変わることだと言えるかもしれません。つまり、大学運営の具体的な局面すべてについて、国が事前にチェックし、その可否を判断することによって大学の品質保証をおこなうという従来のやり方から、事前のチェックは極力おさえて各法人の判断や裁量にまかせながら、最終的にどれだけの成果があげられたか、どれだけのことが達成できたかを事後的にチェックすることで管理するという方式へと変化するのです。この意味で、法人化と大学評価とは不可分に結びついています。



（図 3）現在の大学組織



（図 4）法人化後の法人組織

法人・大学の評価を中心的におこなうのは、昨年十月に発足した「国立大学法人評価委員会」です。この委員会は、各国立大学法人が掲げた「中期目標」がどれだけ達成できたかを中心に、法人の業務運営や経営に関する総合的な評価をおこないます。ちなみにメンバーは学長経験者や財界、マスコミ関係者など十六名で、委員長はノーベル化学賞受賞者の野依良治・理化学研究所理事長です。さらに、とくに教育研究面については平成十二年四月からすでに国立大学の教育研究の評価を実施している「大学評価・学位授与機構」による評価や、またそれ以外にも「大学基準協会」などによる評価もおこなわれます。

そしてこうした大学評価の結果は、運営費交付金の金額に確実に反映されていきます。したがって今後、国が国立大学法人に交付する運営費交付金の総額が急激に大きくなるとは思えません（むしろ縮小されていくという見方もあります）ので、各国立大学法人は六年間の間にどれだけ成果をあげ、どれだけの評価をえるかをめざして大学経営を競い合う「競争的環境」の中に否応なくおかれることになるのです。

2　国立大学法人の組織

さて、このように四月から大学の運営スタイルが変わり、新たに国立大学を設置し、大学経営をになう国立大学法人という組織が登場します。そこで次に、国立大学法人法に示されている国立大学法人の仕組みと四月以降の本学の法人組織について見てみたいと思います。

（1）学長

学長は、大学の長として「校務をつかさどり、所属職員を統督する」(学校教育法)者であるとともに、新たに法人法によって国立大学法人の代表者をも兼ねることになります。

なお四月の法人スタートにあたっては、現在、学長の任期にある者はそのまま国立大学法人の学長となりますので、本学では村田隆紀現学長が引きつづき学長をつとめます。

（2）役員会

国立大学法人において、法人の運営と大学の経営をになう中枢の組織となるのが「役員会」です。

役員会は学長と、学長を補佐する理事とから構成されます。理事は学長が任命しますが、人数は法人ごとに定められており、本学では三名です。また、そこには必ず「当該国立大学法人の役員又は職員でない者」つまり学外者が含まれなければならないとされています。法人や大学の運営に関する重要事項は、学長がこの役員会に諮りながら決定していきます。

なお、法人の役員として学長、理事の他に、法人の業務を監査する「監事」二名もおかれています。

（3）経営協議会と教育研究評議会

役員会の下で法人と大学の運営・経営に関する審議機関として設置されるのが「経営協議会」と「教育研究評議会」です。

まず経営協議会は、法人の経営や財務に関する重要な事項を審議します。協議会のメンバーは議長として学長、そして学長の指名する理事と職員、さらに当該国立大学法人の役員や職員ではない「大学に関し広くかつ高い識見を有する」学外者です。具体的な人数の指定はなく、各法人・大学の規模や事情に応じて決められるようになっていますが、学外者の委員が半数以上を占めなければなりません。大学法人化の仕組みの一つのねらいは、先の理事の場合もそうですが、このように大学経営に学外者が積極的に関与するという仕組みにあります。なお本学の経営評議会は、学長と二名の理事、学長が指名する職員一名、そして学外委員四名の計八名を予定しています。

また、大学の運営に関する重要な事項を審議するのは教育研究評議会です。こちらのメンバーは、やはり議長として学長、そして学長が指名する理事、重要な組織の長、学長が指名する職員となっていますが、具体的な構成は各法人がそれぞれの事情に応じて定めます。本学では、学長と二名の理事、図書館長、教育実践総合センター長、附属学校部長、教授会選出の評議員二名、計八名の構成となります。

（4）学長選考会議

これまで見てきたように、法人化後の学長の職務の重要さと責任の重さは、いままでよりはるかに大きくなります。そのため法人法は学長を選考する組織として「学長選考会議」を定めています。

学長を任命するのは文部科学大臣ですが、文部科学大臣が任命する学長候補者を選ぶのが学長選考会議です。これは経営協議会のうち学外者の委員と教育研究評議会の評議員とから同数ずつによって構成されるもので、本学では経営協議会の学外委員三名と教育研究評議会の評議員（学長、理事以外）三名からなります。

しかし具体的にどのような手続きで学長を選考するかについては、とくに法律では定められておらず、たとえば職員や学生による投票を取り入れるかどうかなどは、各法人それぞれが決めます。本学でも法人化後に早速これらを決めなければなりません。

なお文部科学大臣は、学長が病気になったとき、また「職務の執行が適当でないため当該国立大学法人の業務の実績が悪化した場合」には学長を解任することができますが、その際もこの学長選考会議が文部科学大臣に解任を申し出ることになっています。

3　法人と大学の具体的な運営体制

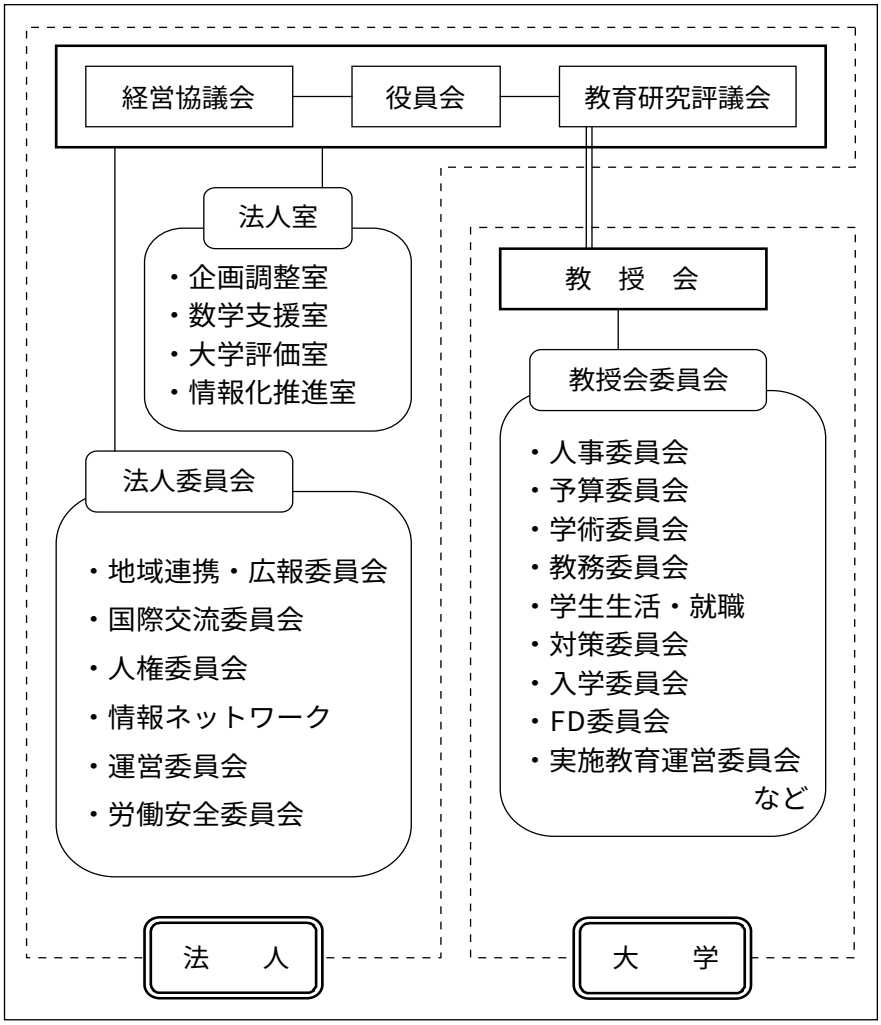
法人化にともない、現在の大学のいろいろな委員会を整理し、運営組織を再編します。運営組織を三つのグループ、すなわち法人や大学の基本的な方針や戦略を練り上げる「法人室」、法人・大学全体に関わることがらを所掌する「法人委員会」、教育研究に関する内容を担当する「教授会委員会」に分けます。

もうひとつの大きな変更は、学部担当組織と大学院担当組織の一体化です。これまでは学部と特殊教育特別専攻科に係わる事項は教授会で、大学院に関する事項は研究科委員会で審議されてきましたが、関連することがらも多いため教授会で大学院に係わる事項も所掌することにします。したがって、以下で紹介する「法人室」「法人委員会」「教授会委員会」が、学部と特別専攻科と大学院のすべてに対応することになります。

（1）法人室

「企画調整室」は大学の中期目標や中期計画を策定し、それを達成するための様々な事項について企

（図 5）法人・大学の運営組織



画・立案します。「教学支援室」は学生の受け入れ、学生の教育、学生の送り出しを、一つの流れとして捉え、各活動が有機的に■がるように調整していきます。「大学評価室」は外部評価や自己点検評価に対処するためのものです。「情報化推進室」は外部ネットワークと学内ネットワークの健全な関係を維持し、また教育や情報発信や学内業務のための学内情報ネットワークの管理と運営を行い、学内の情報化を推進します。これらの「法人室」の室長には学長や理事があたり、室員（若干名）は学長が指名します。

（2）法人委員会

法人委員会のうち、「安全衛生委員会」以外は、従来から教授会の下に設置されていました。「地域連携・広報委員会」は「地域交流・広報委員会」の名称でしたが、「交流」をさらに発展させて「連携」をめざすための名称変更です。また、法人化にともなって教職員は非公務員となりますので、人事院規則が適用されなくなります。そこで教職員の安全衛生を守るために、労働安全衛生法にもとづき「安全衛生委員会」が新設されます。「情報ネットワーク管理員会」と「情報ネットワーク運営委員会」は学内ネットワークのセキュリティを確保するためのもので、文部科学省のガイドラインによるものです。

「法人委員会」の委員長は基本的には理事が担当しますが、「情報ネットワーク運営委員会」は、あつかう事項が専門的・実務的なので情報処理センター次長が委員長を勤めます。各委員会の委員は図書館やセンターなどの組織の長、学長が指名する教職員、教授会や附属学校から推薦された教員などによって構成されます。

（3）主な教授会委員会

「教授会委員会」の委員会のうち、「予算委員会」は教育研究に関わる予算や施設に関することがらを所掌します。また、「学生生活・就職対策委員会」は在学生の生活を幅広く支援する委員会ですが、今後は就職対策をさらに強化しなければならないので、生活支援と一体的に運営できるようにしています。「人事委員会」は大学の教員の採用や昇任に関する審査にあたりますが、大学院を担当する教員の資格審査も人事委員会の担当となります。

また「入学試験委員会」は、入学試験を全学的な視点からとらえ、京都教育大学にふさわしい学生の入学をはかるための方法を検討することが重要な仕事ですが、きめ細かく運営していくために関係する教職員を加えた連絡調整のための会議を委員会の内部に設けます。このような形の連絡調整会議は、就職対策や実地教育を運営する際にも設けます。

各委員会の委員は教授会において選出され、委員長は基本的には二名の副学長（理事が兼ねる）か附属図書館長のいずれかが担当します。ただし、人事

委員会の委員長のみは委員の互選となります。委員の人数は委員会によって異なりますが、基本は四名とし、他の委員会委員と兼任せずに一つの委員会に専念できるようにします。

（4）附属学校部・センター

本学には、七つの附属学校があります。法人化以後は、大学と各附属学校の間および附属学校間の連携をさらに深めていかなければなりません。本学ではこの役割を附属学校正・副園長会議が担うものとし、新たに「附属学校部長」職を設け、その統括にあたることにします。また、附属学校は現在は教育学部の附属となっていますが、法人化後は大学附属の形をとります。これは、法人と大学と附属学校の絆を太くするためです。また、この形をとることにより、附属学校が学部学生の教育だけでなく大学院学生の教育研究にも積極的に活用されるようになることを期待しています。

なお、これまで附属学校の教員は国家公務員であり、おもに京都府や京都市の公立学校との間で人事交流をしていました。法人化して国家公務員ではなりますが、府や市の教育委員会との協議によって、今後もこれまでと同じような形で人事交流ができるようになっています。

附属学校と同様に、附属教育実践総合センターと附属環境教育実践センターも、現在の教育学部附属から大学附属に変わります。附属図書館、情報処理センター、保健管理センターは従来から大学附属であったので、これらのセンターの位置づけは変わりません。

以上に示した運営体制・組織はあくまで、平成十六年四月の法人スタート段階のものであり、固定化したものではありません。法人としてスタートした後に、状況に応じて運営組織を再検討する必要があります。しかし法人への移行期に当たる現段階では、その移行をスムーズに進めることが重要であり、運営体制の極端な変更は混乱を引き起こす恐れがありますので、これまでの組織や運営の仕方を継承しながら法人へと移行するところも多くあります。また、とくに事務局の組織や運営は現行の体制で法人に移行し、法人化に関する事務的なことがらが一段落した段階で、状況に応じて再編する予定です。

トピックス

「解体新書」初版本が図書館書庫で見つかる

附属図書館長　寺田　光世

杉田玄白らによる西洋解剖書の翻訳書「解体新書」が本学図書館の書庫で発見されました。しかも5巻5冊が揃ってどれも良好な状態で。平成15年10月24日の出来事でした。

この出来事はそもそも「発見」か「再確認」か。実は昭和26年に図書原簿に登録され、閲覧カードも作成されていたからです。しかし閲覧カードを繰る人も本を借り出す人もなく、国書総目録（岩波書店、昭和37年）に未記載のままで、50年以上にわたってその存在を誰も知らなかったのですから、やはりこの際「発見」ということにします。図書検索システムOPACがすべてと信じ込んでいたことが発見を遅らせた原因です。現場を直に確かめる大切さを再認識する次第です。

発見の日は、恐るおそる手に取って見ました。題簽紙に解体新書の文字と第1頁に杉田玄白の名。奥付に安永3年（1774年）の版記があります。果たして初版か復刻版か。書誌学からみた判定がまず必要だと考えました。それでこの分野に詳しい司書さんたちの助けを得ながら調査を始めた次第です。

解体新書は初版のみ「解体新書」であり、以後約70年にわたって6度改訂版が刊行されていますが、これらは「重訂解体新書」と呼ばれ、はっきり初版と区別されます。ここでは発見の書を「京教本」と呼ぶことにすると、京教本は本の題目からみて明らかに初版本です。しかし初版本のうちでも、最初の板木を使用したものか、また後年に彫り直しの板木を使用したものか。つまり初刻本か再刻本（再版本）かという疑問が残ります。そこで、京都大学附属図書館の京大図書館本と比較することにしたのです。本の外観のみならず、各丁、印刷書字の筆跡、付図の一つひとつを丹念に比較したところ、後述の2ヶ所を除くと、刷りに使用された板木はすべて同一のものであると推定されました。加えて、刊本に関するこれまでの著述を調査しても再刻本刊行の証

拠は得られないため、現在のところでは京教本は最初の板木による初版本であると推定しています。

京教本が初版本であると仮定しても、当時相当に増刷されていたようなので、京教本の刷り順はどれほど若いものであるかが気にかかります。京教本は初版のうち初刷本か後刷本か。その判定が難問題です。この判定には第 1 に書肆（書物問屋）の住所、第 2 に広告ページ、第 3 に印刷版面の良否という 3 つを手がかりにして調査を進めました。京教本の特徴は書肆住所が「室町二町目」であり、広告ページがなく、印刷版面に磨耗が感じられないという点です。これに対して、京大図書館本は「室町三町目」で、広告ページが付いています。さて、第 1 の書肆である東武書林、須原屋市兵衛の住所記載に関することですが、これまで「室町三町目」と「室町二町目」の 2 通りの解体新書が見つかっています。医史学の専門家で解体新書に詳しい順天堂大学客員教授の酒井シヅ先生にお聞きすると、「住所に関して、三町目から二町目に移転したとする移転説もあるが、移転事実の証拠は見つかっていない。須原屋市兵衛は始めからずっと三町目に住んでいたと思う。何かの理由によって当初の解体新書は「室町二町目」と記して刊本され、その後正しく「室町三町目」に手直したものが刊本されたのではないか。だから「二町目」と記されているものは初刷本に近いと思う」とのことです。第 2 は奥付の後の刊本の広告ページに関することです。解体新書はオランダ語の翻訳本といえども鎖国下で許可を得ずに刊本すれば幕府からお咎めがあるに違いないと考え、杉田玄白は将軍家や公家などへかなりの部数を献上したものとみられます。初版の一部はこのような献上や奉行への届け出に使われるのですが、この場合やはり広告ページは削除して本を綴じたのではないかと考えられます。第 3 の点ですが、木版印刷にみられる匡郭の四隅は刷りを重ねるともっとも磨耗しやすい箇所であり、ここの角に丸味や墨の薄れがでていると後刷本の証拠になります。京教本ではしっかり角張っているようです。以上のように 3 つの特徴が揃う場合は、初版本のうちでも初刷本に近いのではないかとの見方ができます。「室町二町目」でかつ広告ページがないという組み合わせは大変に珍しいものと思われます。それにしても奥付住所記載に 2 種類が存在するのは「解体新書」のなぞというべきでしょう。

解体新書が日本の近世文化史上ことに学術史上に与えた影響の大きさはすでに評価がほとんど定まっていて誰もが認めるところであり、ここにおいて新たに追加することはありません。ただ実物を手にしてみて認識を新たにすることは、杉田玄白は原著に「忠実な翻訳書」をつくるというより、「詳しい解剖書」をつくることをまず考えたのではないかと思う点です。それは、原著以外に他の複数の西洋解剖書から図を引用していることから推測されます。しかも描画タッチが異なる図にも拘わらずです。他の書物から説を引用している箇所が認められることもその証拠かも知れません。解体新書は本学の稀書であり貴重書ですから、今後、適切な保存と利用を考えていきます。

留学生の声

A Generous Educational System
～寛容な教育制度～

教員研修留学生 Lilibeth Velez Rivera
Colombia

I grew with the love and dedication of a woman who was always the great inspiration for all my future life: my mom. I have a strong image of her working at home, helping us with our school tasks, taking care of us and being our mother and father at the same time. Now, that I am trying to look for the reasons why I am in Japan, one of the most simple appears in my mind: I have always had the strong influence of her looking for what she really wanted in life. Japan was not in my mind for me to visit some day. Reasons like distance, money and obviously, language were some of the obstacles to think about it as a place where I could study or even learn many interesting things. When something is going to be given to someone, nobody else will have it. Since I was a school and university student I had the opportunity to relate with people who planted on me the great desire to learn as much as possible. Studying in Japan has been one of those great opportunities that life has given me, not only to have a different idea of what I knew about this country but also about the rest of Asian countries.

Even since I arrived to this country, I concentrated all my energies to discover it. First, and the main reason for my trip, the formal program I applied for:Teacher's Training Program. It has given me the chance to understand how is Japanese Education is and what it makes it very famous all over the world. Through the university teachers, I have visited many schools that have helped me to clarify and comprehend how the English as a second language learning process is in this developed country. I really hope I can take into account all the interesting things I have found here for the teaching-learning process of my country. Second, and quite related to my personal improvement, the experience of all cultural manifestations Japan has and can offer its visitors. I could say that I have enjoyed Kyoto and some other places as much as possible and I have done a quantity of activities in order to get a closer and enhanced idea of Japan and its people. Now, I can understand better how is this marvelous country and how are its interesting and kind inhabitants are.

Great moments in life do not last forever and soon the time to go back to my country will arrive. My soul has now mixed feelings: the immense happiness to see Laura and Santiago,

my children, my family, and terrible sadness to leave behind a country that welcomed me for a significant time, some friends that hand to hand guided me for the paths of the unforgettable experiences I have lived here, to a culture that allows me to understand it more. I am completely sure, the Japanese people, my friends who remain here or have already traveled to their countries, have now a special place in my heart that time will hardly erase. They have left an unforgettable mark fed in my heart with the no number of experiences, knowledge and living time I was fortunate and pride to catch for me and for the people around me. Last but not least, I cannot leave without thanking the Ministry of Education of Japan as well as Kyoto University of Education for giving me, a teacher of a third world country, this great chance. I am not sure if I will come back to Japan some day, but if life gives me this opportunity again, I would like to look for that significant past that will be with me all my existence life on earth.

●日本語翻訳

私に対して常に励ましと勇気を与えてくれた一人の女性、すなわち母の愛情と献身に包まれて私は成長しました。家事をし、子供たちの世話をしたり勉強を手伝ったり、父親と母親の役割を同時に果たしてくれた母の姿をはっきりと覚えています。なぜ私が日本にいるのかその理由を探そうとしている今、最もシンプルな理由が私の心に浮かびます。私はいつも、人生の中で本当に求めているものを探し続けていた母の強い影響を受けていました。日本はいつか訪れようと思っていた国ではありませんでした。距離や、お金の問題や、言葉の壁があったので、日本を、そこで研究し多くの興味深い事柄を学ぶことのできる場所として考えることはできませんでした。何かが誰かに与えられようとするとき、他の誰にもそれを手にすることはできません。できるだけ多くを学びたいという強い願望を私に植え付けてくれた人たちと出会う機会が、学生の頃から何度かありました。日本で研究することは人生が私に与えてくれた大きな機会の一つです。それは単に日本に関する新しい考えを得るためだけでなく他のアジアの国々についても新しい考えを得る機会でもあります。

日本に来て以来、私はすべてのエネルギーをその発見に傾けてきました。第 1 に、私の今回の旅、すなわち私が志願した教員研修プログラムの主要な理由は次のようなものです。この研修プログラムは、日本の教育制度がどのようなものか、なぜ日本の教育制度が世界中で有名なのかを理解する機会を私に与えてくれました。大学の教官を通じて、私は多くの学校を訪問しました。その訪問によって、日本では第 2 言語としての英語がどのように学習されているのかを理解することができました。私が日本で見出した興味深い事柄をすべて私の国の英語教育に役立てたいと心から願います。第 2 に、これは私の人間的な成長にかかわることですが、日本が所持し、日本への来訪者にも提供することのできる日本文化を経験することです。私には次のようなことが言えます。私は京都やそのほかの場所をできる限り楽しみ、日本や日本人に対してより親密で強固な考えを持つために多くの活動をしてきました。今、私は、このすばらしい国がどのようなものか、その国民がどれほど興味深く親切であるかをより理解することができました。

人生におけるすばらしい瞬間は永遠には続きません。まもなく帰国するときがやってくるでしょう。私の心は相反する気持ちが入り混じっています。子供たちや家族に会えるという大きな喜びと、私を歓迎してくれた国を去り、忘れられない生活を経験し日本文化をよりよく理解するうえで私を助けてくれた友人たちと別れなければならないという悲しみです。これだけは確かです。日本の人たち、まだ日本にいる友人、そしてすでに帰国した友人、彼らは私の心に焼きついています。彼らは、数え切れない経験、知識、生活と共に、忘れられない思い出を私の心に残してくれました。最後になりましたが日本を去るにあたって、京都教育大学ならびに文部科学省が第 3 世界の教師である私にこのような大きな機会を与えてくださったことを心から感謝します。再び日本に来る機会があるかどうかわかりませんが、もしそのような機会が再び巡ってきたら、私が生きている限り私とともに存在するであろうこの意義深い日本での経験を思い起こしたいと思います。

研究余滴

私の「なんで、なんでだろう」

理学科教授
（遺伝学研究室）　生島　隆治

定年退職する教官が今更自分の研究を紹介をするというのは、いかがなものだろうかと思いましたが、本学を去るに当たり若者に残すメッセージの一部にでもなればと思い直し筆を執ることにしました。研究余滴という言葉からは、論文には書けない裏話やエピソードなどがイメージされますが、この拙文がそれにマッチしているかは定かではありません。

高校時代に、「地球の歴史は地層に、生物の歴史は染色体に刻まれている。」（木原均）という言葉と「唾腺染色体」とに衝撃的に出会ってから「遺伝学」の虜になり、未だに抜け出せずにおります。20 世紀最大の発見である「DNA 構造の解明」からちょうど半世紀が経ち、今では、DNA 、ゲノム、遺伝子と言った用語は連日のようにメデイアに登場し、日常語になりつつあります。地球上のほとんど全ての生物は、DNA のたった 4 種類の塩基 [アデニン（A）、チミン（T）、グアニン（G）、シトシン（C）] の配列として染色体に格納された遺伝情報に基づいて生命を維持し、生命活動を行っています。ヒトのゲノムは、約 30 億もの塩基対から成り立っていますが、最近その配列が完全に解読されました。これはコンピュータの記憶容量としては、600 メガバイトに対応します。約 60 兆個もあるヒトのどの細胞もこの情報のコピーを持っています。私の興味の中心はこの生命の設計図である DNA、つまりゲノムの「保守性」と「革新性」にあります。

DNA は、A-T と C-G という塩基対が常に正確に形成されることにより、細胞分裂の際に誤りなくコピー（複製）されて娘細胞に継承されます。親から子に遺伝子が伝えられるのも、この原理によって起こります。DNA は細胞内外の環境ストレスに常に曝され傷を受けています。それでも変異が極めて稀にしか起こらないのは、傷が何重もの仕組みで治されているからです（修復）。また、DNA は組換えを行い、新しい遺伝子の組み合わせを生み出します（組換え）。これが生物の多様性を生むもとになり、修復にも役立っています。生命に不可欠なこの 3 つの活動がどのように起こるかが、私の「なんでだろう」なのです。これらの DNA のドラマを演じる多数の役者（タンパク質、酵素）を作っているのも遺伝子です。生命の 3 大ドラマは互いに独立したものではなく、密接に関連しあいながら演じられます。ここでは、組換えのドラマのうちでも、体細胞の染色体内で起こる姉妹染色分体交換（英語の頭文字をとって SCE と呼ばれる）という相同的組換えの研究について述べます。この研究は中断をしつつもかれこれ 30 年程関わってきたテーマですが、最近になってその仕組みや生物学的な意義が非常に鮮明になってきました。

細胞分裂が起こる時には、染色体は半保存的複製によって一対の染色分体（姉妹染色分体）となります。ですから分裂期の染色体を観ると多くがＸ字型をしているのです。姉妹染色分体は、完全に相等しい DNA 塩基配列をもつ双子ですが、その名のとおり年令の違う姉妹（兄弟）です。すなわち、染色分体を構成する DNA 二重らせんの一方の鎖は、同じ時に複製されたものですが、他方の鎖は前回と前々回の分裂で複製されたものです。それなら両染色分体を識別できるのではないか、とふと思いつきました。しかし、染色体を顕微鏡で観察したことのある人は体験されているように、普通に染色したのでは両染色分体はまったく同じに見え区別がつきません。しばらくして、DNA の T をその類似体であるブロモウラシル（BU）と置換すると、その前後で塩基の積み重なり状態が変わるという話を思い出しました。そこで、ブロモデオキシウリジン存在下で連続 2 回の DNA 複製をさせた後に、分裂中期の染色体を観察してみました（図 1、図 2）。驚いたことに、今まで見たこともない「水引」状の染色体の像があるではありませんか。その時の胸の高鳴りは今も忘れられません。“ What did

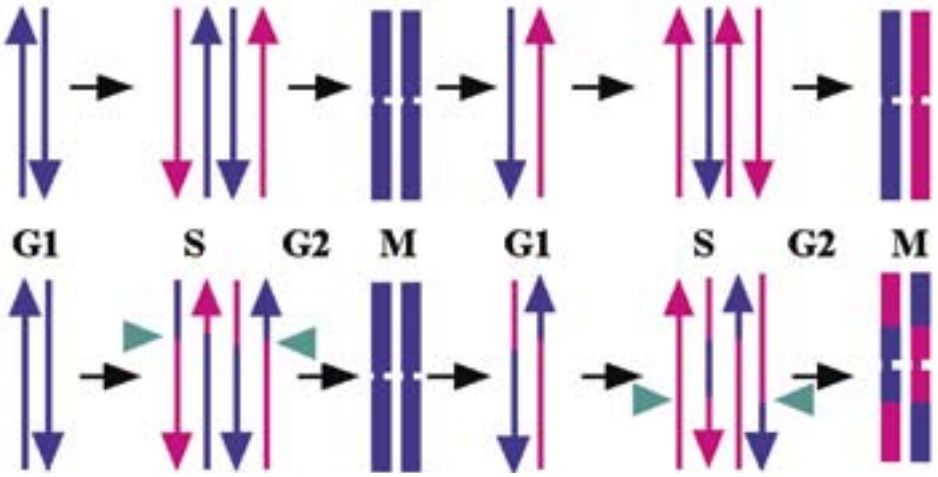


図 1：SCE の分染法
ブロモデオキシウリジンの存在下で細胞を培養しますと、2 細胞周期目のM期には、DNA 二重鎖の両方が BU でラベルされた染色分体と片方の鎖だけがラベルされた姉妹染色分体になりますので、両者を分別染色することができます。図中、各矢印は DNA の一本鎖を示し、赤い矢印は BU でラベルされた鎖を指します。SCE（青緑の矢頭）は、1 回目または 2 回目のどちらの細胞周期で起きても染色の濃淡の切替わりとして検出されます。

you ?" 、"What is this ?" とラボが大騒ぎになってしまいました。30 年前のサンフランシスコでのことですが、時を同じくしてニューヨークでも同様の染色体を観ていたことを後になって知りました。「何かアイデアを思いついた時には、世界中にすでに同じことを考えている人が少なくとも 5 人はいると思え。」という恩師の言葉が実感として分かりました。この分染方法はただちに改良され、極少量の環境変異原・発癌物質で SCE が起こることが判明するや、たちまちのうちに世界中に拡がり思いがけなく一大ブームとなりました。「こんなことをやって何の役に立つのですか。」という学生時代の私の質問に対する、「実験をやる時にそれが何の役に立つかを考える必要はない。良い成果が出れば、それを役立てたいと思う人が別にやってくれる。それが研究だ。」という恩師の答が証明されたのです。

図 2：最初に観察した SCE の顕微鏡写真
矢印は SCE 部位を示しています。解像度は図 3 より悪いですが、SCE を明確に検出できます。

DNA に傷をつけるような薬剤などで処理すると、SCE はよく起こります。ルミノール（ルミノール反応で有名）は DNA に直接傷をつけませんが、1、2 を争うほどの強力な SCE 誘発能をもつことがわかりました（図 3）。本学で学生に最初に与えた卒論のテーマも、SCE に関するものでした。オゾン層の破壊で問題になっている太陽光紫外線 UV-B は、細胞死を起こさない低い線量でも SCE を誘発することがわかりました。染色体末端のテロメアという部位には、TTAGGG という配列が数百個も繰り返し並んでいます。UV-B による SCE が、このテロメアでとくに多く起こることがわかったのは、一昨年のことです。SCE がテロメアの長さを維持するのに役立っていると思われます。SCE が起こるには DNA 複製を経る必要があることは以前から解っていましたが、その詳細は不明でした。ごく最

図 3：ルミノール（1mM）処理によって生成した SCE.
細胞当たり 100 以上の SCE が観察される。

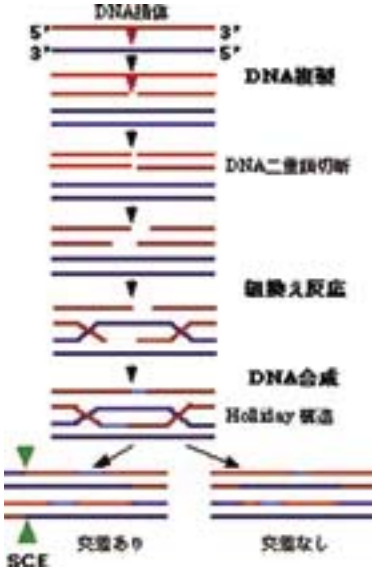


図 4：染色体内の相同 DNA 組換え修復による SCE の生成モデル

近になって、組換え機能の欠損した細胞では SCE が起こりにくいことがわかりました。DNA 複製期に損傷が生じると、修復するために交差を伴う相同組換えが起こります。SCE はこの組換えの産物であると考えられます（図 4）。すなわち、SCE とは体細胞の染色体内で起こる相同 DNA 間の組換えであり、実際に光学顕微鏡で観察できるものです。つまり、分子レベルの出来事を顕微鏡で観ることのできるものとしては、大変おもしろい例のひとつなのです。

DNA の T を BU で置換するという方法は、ミトコンドリア DNA の複製の研究にも役立ちました。BU に対する抗体と蛍光色素を用いると、DNA の複製を観ることができます。核の DNA とは異なり、ミトコンドリア DNA の複製は細胞周期のどの時期にも、どのミトコンドリアでも起こるが、必ずしもすべてのミトコンドリアで同時に起こるわけではありません。これは数ヶ月前に明らかになったことです（図 5）。なぜか、最後まで BU との縁は切れませんでした。

本学に就任してからは、教育の一環として院生や卒論生とともに研究を進めてきました。ここでは紹介できませんでしたが、いろいろな若者が研究室に入って来てくれたお陰で、これ以外にもテロメアの維持、ミトコンドリアゲノムの変異、放射線適応応答、コメットアッセイ、紫外線損傷の修復、低温ストレス応答、DNA 情報による類縁関係等々の多くのテーマを手掛けることができました。彼らの努力と苦闘の結果、多くの感動を共有できました。研究は「なんで、なんでだろう」という知的好奇心から創造されます。それは、一種の本能・感性に根ざすものであり、その人の性格・個性・人となりが反映されます。その意味で、芸術とも相通じるところがあると言えるでしょう。一つの疑問を解くことは、新たな疑問点を浮き彫りにすることになり、研究はさらにつづきます。研究は人に命じられてするものではなく、自己の内面から滲み出てくるものです。それ故、研究は本質的に自由なものでしょう。大学を去る今となって思うのは、何と少ししかできなかったことか、ということです。

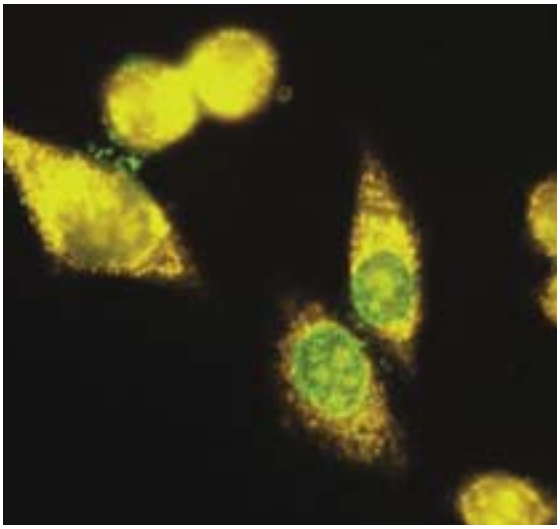


図 5：ミトコンドリア DNA の複製
ブロモデオキシウリジンを加えて 1 時間培養した後、ミトコンドリアを選択的に染色する蛍光色素（朱）と BU に対する抗体（緑）で二重染色した細胞の蛍光顕微鏡像です。複製したミトコンドリア DNA は両者が重なり黄色に見えています。中央の 2 個の細胞はS期、左上の大きな細胞は G2 期、丸い細胞はM期のものです。

京教今昔物語

家政科 教授　加地　芳子

附属京都中学校の生徒とともに（筆者近影）

「十年一昔」という言葉に感慨を込めながら、今、研究室の窓からＣ棟前の中庭を眺めております。私が、本学に転任して参りましたのは、平成５年２月でした。そして、初めての出勤の日は、前夜降り続けた雪が、キャンパスを覆い、まさに「白い大学」の印象を受けたことを覚えております。以後、体験したことのないほど全てを覆い尽くした雪景色は、冷たく無機的な雰囲気さえも感じさせていました。その後､初めてお目にかかった蜂須賀学長から｢待っていました・・｣という暖かいお言葉で辞令をいただき、先ほどまでの冷たく無機的な風景が、柔らかい銀世界へと変わっていき、同じ風景でも見る時の気持ちで、ずいぶん変化するものだということを実感したものでした。

また、Ｃ棟前の池の横に、木立にまぎれて老木の紅梅があり、毎年花をつけます。忙しく通り過ぎると見落としてしまいそうなほどに、毎年花がつく枝が少ないのですが。丁度、修論・卒論の指導などで疲れて家路を急ぐ時など、特に、夜の闇の中では、その香りを強く感じます。ふと、暗闇の中で、足を止めて、大好きな梅の香りを楽しみますと、不思議なもので、疲れが消えるような気がするのです。このような時に、私達が自然と呼応しながら生きていることを実感します。

春の桜並木の見事さは言うに及ばず、秋には、掲示板前の金木犀の壁からの香りを、研究室の窓を全開して呼び込んだり、疲れたり、気落ちした時などには、講堂前の大楠の幹に触れるだけで元気と勇気をもらえます。ふと足下に見つけた雑草の花に、子どもの頃の野原での遊びを思い出したり・・と、私の京都教育大学での日々には、キャンパスの自然との触れ合いを抜きに語ることは出来ません。

さらに、別の例を紹介したいと思います。

平成元年の学習指導要領改訂を受けて、小学校に生活科が新設されることになりました。本学でも、関連科目を開講しましたが、平成６年から、その

現代日本が失ってしまったものに気付かせてくれたタイへの旅

授業の中に、野外活動を組み込むことになりました（2 年前より、授業内容を改変し、現代は実施していません）。体育学科の遠藤浩先生を中心に関連教官が協力して、一泊二日のキャンプを組み込み実施することになりました。

トレーニングセンター周辺の雑木に囲まれたスペースに 10 数個のテントを張って、探検活動・制作活動・野外調理をグループ活動として体験する試みです。

図上演習通りに運ばずてこずったり、予想を越えて大活躍をしたりと、日常の授業では見ることが出来ない学生の顔に触れ、私達教官にとっても興味深いものでした。このように、わざわざ外部施設を利用せずとも、学内で 50 人余りが宿泊活動できる大学など、あまり聞いたことがありません。周辺の草木などを使いながら制作活動やキャンプができるのです。（残念ながら、食材は買出しに行きます。）

ところで、ある年、朝起きてみますと、靴の片方がなくなる事件が起こりました。夜分の外部からの侵入者はないでしょうし、片方の靴を持ち出しても・・・

皆で手分けして探したのですが見つかりません。結局、犯人は、奥の茂みに住み込んでいる狸であろうということに落ち着いたのです。狸親子の仕業であると言うことに。はたして、ポン太の玩具箱として靴が活躍したかどうかまでは、知る由もありません。靴を失った学生さんには、申し訳ないのですが、何とほのぼのとした事件ではありませんか。

昨年の秋には、体長 1 メートル程の灰色の野鳥が、1 週間近く研究室の窓の近くまで遊びに来ていました。また、ある学生は、黒紫に実った桑の実を摘んで焼いたバウンドケーキを差し入れてくれたり、本学ならではの豊かさや自然との日常的な触れ合いができる素晴らしさがあります。

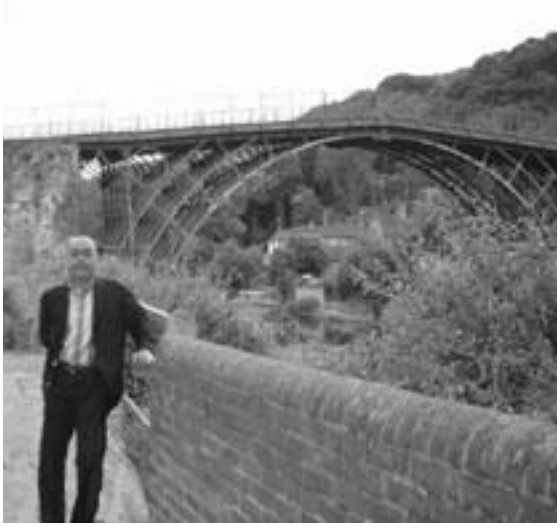
そして、このような懐かしさや感慨を感じているのは、私一人ではないと思います。

毎年、巣立っていく学生諸氏にとっても、この自然豊かなキャンパス・ライフは忘れることのできないものとなっていくことでしょう。今時、大都市にありながら、このように恵まれた環境にある大学は珍しいと思いますし、この何物にも代え難い環境をできるだけ自然なままで今後も大切に守っていただきたいと思います。

あまりに忙しすぎる毎日であるからこそ、このようなオアシスのようなできごとや風景が嬉しく、私達を癒してくれているのだと思います。しかも、特に若い学生諸氏が、現代が失いつつある情景に関わる経験をもつことは、これからの我々のあり方を求めていく時に、どこかで生かされるのではないかと信じています。旅人としてではなく、日常の中で自然と付き合う体験こそが貴重で得がたいものではないかと思います。人類が環境とどのような形で共生するか、そのためにどのようなライフスタイルにするのかなどを考えるための「生きたミュージアム」として、その真価を発揮することができれば嬉しいことです。いたずらに現代化を追い求めるのではなく、自分たちが大切に持ち続けてきたものに新しい価値を吹き込み、真の意味での「新しいキャンパス」が、構成員全員の手で創造されることを期待しています。

英国に住んで

産業技術科
学科教授　関根　文太郎



2002年9月より2003年6月まで、英国中部の都市バーミンガムで在外研究の機会を与えられ、在英生活の中で貴重な体験をし、多くの収穫を得ることができた。まず、私の研究目的は、バーミンガム大学工学部機械工学科のディーン教授（名誉教授だが現役で研究教育を行なっている）のもとで、プレス製品のCAD（Computer Aided Design）の研究をすることであったが、専門の研究成果については、後日報告させていただくこととして、ここでは、様々な、体験の中から印象に残ったいくつかを述べる。

英国に滞在経験のある方たちから、あちらへ行ってから住む家を探すのは難しいと聞いており、渡英のかなり前から先方にお願いしていた。しかし、結局渡英してから現地で探すことになった。Prof. Deanは非常に忙しい方（1週間のうち学校へは、1，2日位しか来ない、後は外で仕事をしている。いわく学校の仕事はPart time job）なので、先生と同じ研究室のDr.Linに同行をお願いし、ホテル住まいのまま、物件を探すことになった。まず、下宿先を紹介する部署に行ったが、時期（入学時の学生などの入れ換え）が過ぎて、ほとんどの物件が予約、契約済みで、他の学生たちと同様、学外の不動産屋（Property）をあたることになった。リン先生もまた、忙しい人なので、妻と二人不動産屋の物件リストをもらい、環境と値段を調べ、これはと思う物件を直接見に行ったり、担当者に案内してもらったりして探した結果、学校からは少し離れていたがようやく気にいった物件（イギリス特有の長屋風一軒家）に出会った。そこで、リン先生共々契約の話をしに不動産屋へ出かけた。契約関係の書類の説明をしてもらったが、日本語でも難しいこの種の書類で、10ページ近くある英語の契約書をその場で理解出来るはずもない。実は、それまでにも時間や接客態度に不誠実さがあったため、よく説明もせず、二言目には、Moneyを繰返す担当者に、その態度はあまりに失礼ではないか、と妻が怒ってしまった。リン先生もその通り失礼だと言って一緒に抗議してくれた。帰り際、リン先生も「無理して契約しなくて

いいから良く考えて」と言ってくれたが、担当者は気に入らないが物件を気に入ったので翌日契約をした。担当者は、apologize とはいったが sorry はしなかった。その上契約書、学長名義の収入証明書の他に、外国人は保証書（リン先生に書いてもらった）も必要、さらに保証金と家賃の前払いを終え、ようやく念願の家（家具が全部ではなく一部ついている）に落着くことができたのは、渡英後 2 週間経ってからであった。形式ばかり重んじて、実際の内容を重視しないという不合理を、この他にもよく遭遇した。これがイギリス式なのだとつくづく思い知らされた。ただし、住居は、裏庭には毎日リスが遊びに来るし、広い公園は近いという環境にめぐまれた住居であった。

さて、バーミンガム大学は医学部も備える総合大学で、キャンパスは市の南部に位置し、各学部の建物が建っている。大学は設立してから約 100 年経っているそうだが、殆どが近代的な建物である。その中には、有名な絵画を含め貴重な絵画を集めた美術館があり無料で解放され、観光コースにもなっている。この大学の最初の音楽科教授があの「威風堂々」を作曲したエドガーだそうである。マンチェスターなども近く産業革命の中心的な場所だけに、機械工学でよく聞く人の名前（例えばワットなど）のついた部屋もあったが、大学とは関係ないようである。私の泊まったホテルの会議室にも「Watt's Room」と名前がついていた。キャンパスでは、イギリス全体がそうであるように、古い物が大事に使われているのをよく見かけた。例えば、日本の井関の農業機械（今では、日本のどこにも見られない数十年前の旧式機械）を使って街頭の上部の植木鉢の花に水をやっていたり、機械工学科の建物内のエレベータが昔の日本橋三越などのデパートにあったような、二重扉で、エレベータの外側の鉄格子の扉を手で開けてから、エレベータの扉が開くと言う、非

常に古いタイプのエレベータが動いていた。これは、歩いて上り下りした方がはるかに早く、殆ど乗らなかった。掃除の人たちなどが、大きな道具を運ぶために使用していた。もっとも、これがあったのは近代的な工学を研究している機械工学科の建物のみであった。これらは、いかにも伝統を重んじるイギリスらしいと感じられた。また、キャンパスでは、四季折々に造園業者が花などを植え替えているが、特に記憶にあるのは、チューリップとラッパすいせんである。ディーン教授の教官室は、機械工学科の建物の隣にレンガ造りの旧式な一軒家で実験室と続いてあった。機械工学科の建物の外側には写真のように、雷と歯車がシンボルとして描いてあり、「To Strive to Seek to Find and Not to Yield」（探求に努力し、決してあきらめるな）と書かれている。この「Yield」という言葉は、材料の実験などに良く出て来る単語で、材料の降伏（破壊）という意味で使われており、決してあきらめないという、意気込みがよくあらわれていて、さすが機械工学科だと思った。

バーミンガムというと、先に述べた通り産業革命と関連した土地であり、博物館などでも貴重な機械、施設がそのまま状態よく保存されており、見学に出かけた。それらの中で、ディーン先生が是非行って見なさいと推薦された Ironbridge を紹介する。これは、1779 年バーミンガム西部のテルフォード郊外の River Seven にかけられた、世界で初めての本格的な鋳鉄製の橋で、高さ 14 m、全長 30 m である。それまでと比べ大きな鋼材を安定よく造るために、新たに信頼のできる技術が必要であった。これらの技術に加え、ワットなどで知られる蒸気機関の発明により、安定した大きな動力が得られるようになり製鉄を始め各産業が盛んになっていった。そして、日本でも製鉄業の発展さらに産業の発展へとつながっていった。

以上、英国で生活した経験の一部を紹介させていただいた。このような、貴重な体験をさせていただき諸先生方ならびに文部科学省に感謝いたします。

養護学校へ、来てみませんか

附属養護学校
副校長
小竹　健一

附属養護学校は、教育大学の東、徒歩 15 分くらいのところにあります。京阪墨染駅からは、墨染通りの坂を東へ 20 分くらい登ったところです。墨染通りの坂道から左へ入った住宅街の中に校門があります。その校門からの坂道を降りるように校内に入って行くと、校舎やプール、こども広場が見えてきます。校舎や本館の建物は、丁度谷間の底の部分に位置し、それらの周囲を「たけのこ山」の竹林やクヌギの雑木林が囲んでいます。本校を訪問される方は、まずこの自然の教育環境のすばらしさに驚かれます。近所の方の中には本校を「ムーミン谷の学校」と呼ぶ人もおられ、時々、ハイキングの方が迷い込まれるほど魅力的な自然が感じられる場所です。

養護学校の歩み

本校は昭和 44 年、京都府下では初めての知的障害養護学校として丹波橋の附属桃山小学校の敷地内に開設されました。しかし、養護学校誕生の兆しは、昭和 36 年に附属桃山小学校、昭和 38 年に附属桃山中学校に特殊学級の開設に始まっていました。

そして、現在の場所に移転してきたのは昭和 47 年 4 月です。当時、全国の附属養護学校のモデルとして大亀谷の地に本館や小学部・中高等部の教室、特別教室、体育館、プールなどが完成しました。

第 1 回入学式（昭和 44 年）

その後、昭和 57 年から 58 年にかけて、児童生徒・保護者・教職員で校内全域へ 1200 本の植樹を実施しました。その時の樹木が見事に成長し、現在の緑豊かな教育環境をつくっています。昭和 61 年の日常生活訓練施設「いきいき棟」、運動能力育成施設「こども広場」、屋外炊飯施設「キャンプ広場」の竣工でほぼ現在の養護学校の姿が完成しました。「こども広場」の企画の際には、建築家・安藤忠雄氏にも相談に載ってもらい、貴重なアイディアを頂きました。

新校舎工事風景（昭和 46 年）

昭和57年当時のこども広場

また、平成 11 年には全国の附属養護学校では始めての在校生・卒業生・大学・地域の共用型施設、「特別教室棟」が新用地に完成しました。この施設を

現在のこども広場

使用して、本校と大学、地域、卒業生との連携・協力による数々の新しい取り組み（介護等体験、健康さわやか教室、生涯学習センター活動など）がスタートしています。

特色ある教育活動

恵まれた自然環境を活用した学習

「たけのこ掘り」や自然観察園での「田植え」から新学期の学習が始まります。小学部のこども広場を中心とした「からだ育て」から、高等部の年間を通しての「椎茸栽培」まで、天候が良ければ、この恵まれた自然のもと、屋外での体験的な学習が基本です。

「つくる活動」を中心としたカリキュラム

高等部のバザーに向けての「作業月間の学習」に代表されるように、特に中学部から高等部では「つくる学習」が教育課程の中心となります。

「小・中」「中・高」学部を超えて、先輩後輩との学び合う・教え合う活動も組まれます。

多様な宿泊学習（仲間とのかかわり）

「いきいき棟」での宿泊学習は、夕食の買い物や調理、入浴もクラスの仲間と一緒です。「臨海学習（2泊3日、小·中・高）」、「キャンプ学習（1泊2日、中・高）」は学年、学部を超えた先輩後輩と一緒です。「いきいき棟」での宿泊や「臨海学習」、「キャンプ学習」、各学部の修学旅行などの宿泊を伴う学習での年間宿泊数は約30泊を超えます。

地域との連携

放課後には、ほぼ毎日のように、地域の子どもたちが学校へ遊びにやってきます。また、最近の学校祭やバザーの学校行事では、地域の方の来校が本校関係者よりも多くなりました。定期的な地域連携事業として、「さわやか健康教室（対象：60歳以上の老人）」「子育てサークル（対象：0～3歳児とお母さん）」を藤城社協との共催で実施しています。平成15年4月から実施の「子育てサークル」事業は、母子、63組の登録があり、毎回３０組以上の参加があります。今では、大好評の連携事業なりました。

生涯学習センター活動（卒業生支援）

卒業生の対象の生涯学習事業・サークル活動がスタートしてから4年目を迎えます。毎月、第3日曜日「茶道」「サッカー」「ウォーキング」などの活動を実施しています。卒業生とその保護者が中心となって立ち上げましたが、現在は在校生や現役保護者も参加するみんなのサークル活動となりました。

親と学校が一緒になって子どもを守る。

附属桃山小学校
副校長　川端　建治

校区が広い本校でも、児童の徒歩通学の方面や私鉄下車駅のまとまりを一区域として、16 班からなる地域別班を組織している。それぞれの班の子どもたちは、学期始めに行う地域別児童会で、各区域の最年長の班長を中心に、通学途上での安全やマナーについて話し合い、考え合うことになっている。異学年でも同じ電車で通う者同士は、いつも電車内でお互いに顔を合わせ、安全な通学のために上学年が下学年の子どもの面倒をみたり、電車内や駅構内でのマナーについての注意をし合ったりと、それなりの交流が起こっている。

しかし、その班の子どもの保護者同士は、これまで同じ駅で乗降する同じ班の子どもの顔や、それぞれの親の顔をお互いに知らないというのが普通であった。

附属池田校での事件以来、保護者の間から、子どもの通学の安全を守るためには、学校だけに任せきっておくのではなく、親同士も、もっと子どもの通学や地域での生活の安全に協力し合っていくことが大事ではないかという意識が高まってきた。

それまでにも本校では、子どもたちの登下校の安全のために、下校時刻に合わせて、全校の保護者の協力で、学校周辺と学校から近鉄・京阪の丹波橋駅構内までのパトロールを行ってもらってきたが、親の心配は、むしろ各地域の最寄り駅から自宅までの間であった。それぞれの地域や通学路の安全状況について、もっと情報を交換し合って、親としてできることを考えたい。このような声が育友会の本部に多数寄せられ、親同士の地域別集会を持とうという動きになっていった。

池田校の事件以来 3 年目になるが、今年は、夏休み前に、子どもと親が同席しての親子地域別集会を持つことができた。目的は、「同じ地域別班の親子同士が、互いに知り合う」「児童の登下校時安全確保のために、地域・通学路の状況について、情報交換を行う」であった。　司会進行や記録は、育友会の学級委員や本部役員の方々が中心となって、地域別担当の教官が補佐役を務めながら、どの班も真剣な話し合いが行われた。

話し合いの目的についての共通理解を図った後、親子自己紹介が行われ、その後、事前に取られた地域や通学路で気になることや連絡したいことについてのアンケート結果をふまえた話題にそって、さまざまな情報交換が行われた。親と学校が、力を合わせて子どもたちの安全を守ろうという意識が、これまで以上に高まった時間であった。

京都小学校が変わりました

附属京都小学校
副校長　多田　光利

広報第 112 号で紹介いたしましたが、改修工事は無事終了し 12 月 26 日にその全貌を見せました。そこでその一部を紹介します。児童の安全面を考え設置された歩道との間のフェンス、水道管や電線などが通る管もすっきり隠れてしまった廊下の天井、校舎西側に新しく設置された非常階段、より広い部屋としての利用も可能にするスライディングウォール、和式も少し残して洋式中心のトイレなどなど。

そして、改修が終了した各部屋には空調設備も完備され、蒸し暑い中での学習活動から解放されることだろうと思います。また、改修を機に同窓会の寄付により正面玄関棟屋部の破風飾りも復元されました。

正面玄関と棟屋部の破風飾り

廊下と天井

新しく設置された非常階段

スライディングウォールを設置した教室

歩道との間のフェンス

「MET全体発表会」の開催

附属桃山中学校
副校長　多羅間 拓也

METの活動の様子

例年のように、本校では「ＭＥＴ全体発表会」を開催しました。「ＭＥＴ」とは、本校の「総合的な学習」の中心になる学習活動で、「Momoyama Explorers' Time」の頭文字を取って付けられた名称です。「ＭＥＴ」では、「環境」「国際」「福祉・健康」に関わる内容で、あらかじめ用意されたいくつかのコースの中から、生徒が自分の興味関心にあわせてコース選択し、そのコースの中でさらに生徒がさまざまな課題を設定し、主体的に課題解決的な学習を展開しています。6 年前から始めたこの学習活動も、過去 5 年間の反省をもとに、本年度から 2，3 年生が学年の枠をはずして取り組む「ＭＥＴ」と、1 年生を対象にした「プレＭＥＴ」とに分け、その活動の充実を図っています。「プレＭＥＴ」は、「ＭＥＴ」の準備にあたる学習活動で、学習課題の設定の仕方、協議や討論の方法、調査研究の方法、プレゼンテーションの仕方などを学ぶほか、「ＭＥＴ」の参観、地元「伏見」を対象にした課題解決学習の練習（伏見学）などに取り組みます。

さて、「ＭＥＴ全体発表会」では、生徒の司会進行によって、「ＭＥＴ」の 12 コースと「プレＭＥＴ」の活動報告がありました。今年度開設された「ＭＥＴ」のコース名は、＜バードメイト＞＜水遊学＞＜音探究＞＜スローフード＞＜世界の子ども＞＜What's 日本＞＜サウンドマップ＞＜京都リサーチクラブ＞＜情報満載広告チラシ＞＜スポーツ　エブリバディ＞＜子ども福祉＞＜福祉ボランティア＞の 12 コースでした。発表会場の体育館には、パソコン、プロジェクター、ＯＨＣなどの機器が用意され、それぞれの発表で、パワーポイントを駆使したり、クイズ形式を取り入れたりするなどのプレゼンテーションに工夫がなされていました。各コースの発表にたいする質疑応答も活発になされ、最後に副校長による講評で閉会しましたが、生徒の学習活動が多彩に展開されていることが、改めて実感できる「ＭＥＴ全体発表会」になりました。なお、この発表会は保護者はいうまでもなく、観察参加実習の学生にも公開されました。

ディスプレイ型 ポートフォリオ

MET 全体発表会

タイ国訪問

附属京都中学校
副校長　橋本　雅子

タイ国立アユタヤ地域総合大学附属中学校への生徒派遣プログラムが 12 月 21 日から実施されました。七回目となる本年は、20 名の代表生徒と 4 名の教官が 12 月 21 日から 27 日まで一週間、交流校であるアユタヤＲＩ附属中学校を訪問し、学校で交流会を持つと共にタイの生徒の家庭でホームスティを行いました。

本校の総合学習では、二年生が「国際理解」をテーマに学習を展開していますので、その一環として代表生徒は、二年生を対象としています。代表生徒は、タイの生徒との友好・友情を深めると共に総合学習の時間に学習した日本の文化を紹介したりタイの文化の実際を日本に伝えることが重要な目的となっています。

今回は、タイへのおみやげとして、二年生全員で木札を首飾りになるようにつくりました。木札には、筆で自分の好きな言葉（漢字）を書き、メッセージカードにその言葉の意味を英語で紹介しました。タイの生徒たちは、とても木札を気に入ってお守りのように毎日つけていました。

また、タイの生徒が企画してくれた、歓迎会では、タイ生徒が本校の「校歌」を演奏し、日本語で合唱してくれました。それを聞いたときには、胸が熱くなり、歓迎の大きさを感じずにはいられませんでした。

その後、交流授業や課外授業、観光と盛りだくさんのプログラムが用意されていましたが、生徒たちは、どれも忘れることのできない思い出になったと感じます。

【生徒の感想】2 年Ｃ組　　鄭　悠希

＜中略＞ 2 日目の歓迎式典で、会場に入った瞬間から私は驚きの連続だった。生徒全員が一丸となった歓迎ムードに圧倒されてしまった。また、タイの生徒は、どこでも積極的に話しかけてくれてとても親切だった。タイの生徒の明るさと暖かさは私たちにとってとてもうれしいことであり、同時にタイの生徒が日本に来訪してきたときの私たちの歓迎の態度を考えさせられた。

このタイの訪問で、私を含めおそらく全員が「楽しかった」と声をそろえて、貴重な体験をさせてもらえたと感じていると思う。だから私は、タイで楽しんだ以上に日本でも楽しんでもらいたいと思う。この交流がこれからも続くように、またより良い交流になるように今まで以上に努力しようと思う。

土曜日に園開放

附属幼稚園
副園長　川端　智江

土曜日に親子で半日安心して過ごせるように、園開放日実行委員会の保護者の方々と計画しました。育友会長が所属されている少年サッカークラブの学生コーチたちサッカースクールを開きました。コーチの中には卒園生がいて 15 年ぶりに再会した担任の先生に近況報告などをしていました。遊戯室や園庭には実習を終えた幼児教育専攻 3 回生の学生たちが、スタンプラリーやアスレチックコースなどを用意しました。中廊下では、拍子木をたたいて「紙芝居が始まりますよー」チョン・チョン…… チョン！ お父さんの声が新鮮なのか子どもたちは、お化けの話に聞き入っていました。

お天気にも恵まれポカポカ陽気の中、イチョウの木の下では家族で泥団子を作ったり、平均台に腰を下ろしてお母さんたちのおしゃべりにも花が咲いたりしました。

子どもたちは思い思いの遊びを楽しみ、「もっと遊びたいなー」と帰りました。月曜日には朝から屋上で「始めは、並んで『おはよう』って言うのやで！」とサッカーが、保育室では拍子木を鳴らして紙芝居屋さんが始まりました。親子、幼児教育専攻の学生にとって、貴重な体験になりました。このような機会を増やしていきたいと思っています。

スーパーサイエンスハイスクール(SSH)とレクチャーコンサート

附属高等学校
副校長　斉藤　正治

【SSH について】

既に昨年度の広報誌で掲載しましたように、附属高校はスーパーサイエンスハイスクール (SSH) に指定されています。昨年度の 26 校に加え、本年度 26 校が指定されました。2 年目になっての課題は、この研究開発の評価をどうするのかという点だろうと考えています。教育活動の研究開発を評価する場合、多くは個々の科目内容の理解度や行事ごとのアンケート結果をもとに評価をしていくことが行われています。ただ、こうした方法では教育活動全体がどのように評価されるのかが見えにくい難点があります。私たちは、このような点に改善を加えて、教育活動全体が生徒にどのような影響を与えて、生徒を変容させていくのかを、何とか明らかにしたいと考えています。そこで、全容を示すのは無理としても、2004 年 2 月に開催する本校主催の研究集会ではその一端を示せればと考えています。

SSH では外部評価をうけるための会議を開いていますが、本年度も 10 月に開催しました。当日は予定時間を大幅に超えて白熱した会議となりました。SSH の授業では科学技術への関心を深めるために、先端的な研究などにも触れることをカリキュラムの中に含めています。運営指導委員の関心は、そうしたカリキュラムの有効性についてでした。基礎的な理解の上に先端的な研究があり、先端的な研究を理解していくことは無理があるので基礎的なものを重視するべきだという意見と、10 代後半の年代の時に先端的な研究に触れることが与える刺激の

有用性も認めた方がよいという意見です。多分どちらも納得できる意見で、委員の方に大きな意見の違いはないのかもしれませんが、カリキュラムのあり方を考える上では興味深い議論でした。

【レクチャーコンサートについて】

最近いろいろな学校で外部講師を招いた特別授業が行われていることはご存知のことと思います。附属高校には以前よりその制度があり、保護者、あるいは本学の教官に高校生を指導していただいています。

その一環として、附属高校では地域交流・広報委員会との共催で『レクチャーコンサート』を開催しています。本年度は第 6 回を迎えました 。これは本学音楽科川口容子教授が附属高校の生徒に器楽演奏を中心に指導いただき、その成果を地域の方々にも公開してお聴きいただく機会です。附属高校生は他の高校生に比べていろいろな楽器を練習している場合が多く、多様な楽器構成で室内楽を組むことができます。室内楽に深い造詣をお持ちの川口教授がそれに着目されて続けているコンサートです。今回も年度当初に生徒から出演希望を募り、それに基づいて楽器編成、曲目選定などを行い、秋から川口教授の数回にわたるレッスンをうけて昨年 12 月 18 日に開催しました。出演者の演奏能力を問うことはなく、「音楽する楽しみ」を味わいたい生徒が出演していますので、出来不出来にムラがあることはやむを得ませんが、用意した席だけでは足りず、立って聴いていただく盛況で、和やかなコンサートとなりました。

椎茸菌の植付け

附属養護学校
副校長　小竹　健一

養護学校の特産品（？）の一つに椎茸があります。本校では高等部の作業学習として、裏山の竹林の中にほだ場をつくり、そこで椎茸のほだ木を管理し、椎茸の栽培をしています。今、その椎茸が生えてくる原木に椎茸菌を植え付ける作業が最盛期を迎えています。

この椎茸のコマ菌の植付けは１年の中で最も寒い時期に、なおかつ屋外で行われます。（この寒いという条件は、椎茸菌以外の他の雑菌が入り込んで繁殖することを防ぐために必要です。）

この学習は、中学部の３年生と高等部の１年生の合同学習です。長さが１ｍくらいの原木（クヌギ）に電動ドリルで小さな穴を開け（１本に５０～７０個）、その穴に椎茸菌が付着したコマ（小さな木片）を打ち込んでいきます。中学生と高校生が二人一組となり、先輩である高校生が中学生をリードするように作業に取り組みます。１週間に約５００本の原木にコマ菌を打ち込みます。

高等部の１年生はこれまで１年間、椎茸の世話（栽培学習）をしてきました。この中学部の３年生との植菌作業は、椎茸栽培学習についての締め括りでもあり、次に椎茸の世話をすることになる中学部の生徒との椎茸栽培についての実質的な引継ぎでもあります。中学部の３年生は、この期間高校生と共に活動することで、椎茸に関するいろいろなことを教えてもらい、「次は自分たちがやっていくんだ」という自覚をつくります。高校生の見本となるような取り組みの姿勢（さすが！）は、次の椎茸栽培を担う中学生への「しっかり、頼むぞ！」という励ましでもあるかのように感じられます。

養護学校のある大亀谷は、この椎茸の植菌作業が終わると春がぐっと近づきます。

非常勤講師から

今こそ包括的な環境学を
ー環境学を志す学生へー

社会科学科
非常勤講師　今井　秀樹

「もはや戦後ではない」という言葉がもてはやされた高度経済成長期（1960年代頃）に日本などの先進各国は一斉に「公害問題」に直面した。もちろんそれ以前に経済成長に伴う社会のひずみによる健康被害の例は存在する（日本でいえば足尾銅山あるいは水俣における例など）のではあるが、これほど大規模にかつ同時期に環境、さらにはとヒトの健康をも脅かす事態が生じたことはかつてなかった。それは豊かさを享受することの代償であるともいえる。かつての公害問題頻発の時代に人類が学んだ事柄を体系的に教育の場に生かす努力がなされなかったことが現代の地球環境の危機的状況をもたらしたと言っても過言ではない。その後公害問題という言葉はいつのまにか「環境問題」という単語に取って代わられている。この言葉の定義にまで踏み込む紙面的余裕はないが、その包含するところは従来の公害型環境汚染問題のみならず、環境ホルモン、食糧、人口、地球温暖化あるいはオゾン層破壊など多岐にわたる。経済成長のみならず科学技術の高度化とグローバル化によって問題が地域的なものに留まらず、地球規模の問題にまで拡がったことによるものである。

「環境」とはヒトの周囲にあるもの全てであり、かつ個々のヒトの体内もそのヒト固有の環境である。ヒトとその集団は周囲にある様々な因子と生物的あるいは社会的に関わり合いながら生存し、またその関わり合いの中で生存に有利な遺伝子を選択して子孫を残している。「環境問題」とは自然科学のみの問題に留まらず、人文科学あるいは社会学など幅広い学問を融合して解決すべき事象ばかりとなる。事実ヒト自身を含んだ環境の諸要素の重要性が次第に認識され、生活の質 (QOL: quality of life) に注目すべきこと、さらには自然科学の域を超えた倫理の問題までもが環境問題の解決に重要であることが自明のものとなりつつある。かくいう私も社会科学科の非常勤講師として「地域環境学特講」を担当しているが、その講義を受講した学生諸君はご存じの通りそこで触れられる問題は身近な問題から地球規模の問題まで、さらに学問領域の枠を越えた幅広い事どもばかりである。近代の学問の大きな流れは細分化しながら発展を遂げるというものであったが、こと環境学という森羅万象を包括的に俯瞰する学問はその例外的な存在であると言えよう。

環境学を志す学生諸君には個々の問題を全体として総合的に見るという研究態度を身につけて頂きたい。前述の内容と重複もするが、従来の公害問題は汚染源・発生源と健康影響とが一対一の目に見える形であり、因果関係の特定が容易であった。しかし上述のごとく近年の環境問題には多くの因子が、時間的・空間的な広がりを持って関連している。このように直接把握することが困難な環境問題に適切に対応できる教育者あるいは研究者となるには、環境問題を構成する要素やそれらの相互連関を包括的に認識して解決をはかることのできる視点を常に持つことが肝要である。本学における環境学コースのカリキュラムは既存学問分野横断的な連関的視点から統合知に融合させた文理融合的かつ実践的なものである。ここで学んだ事を知の基礎とすればグローバルかつローカルな観点から環境を評価・保全しうる高度で実践的な教育者あるいは研究者となることができるであろう。

紙面の都合で具体的な表現を避けざるを得なかった。地理的な困難さもあるかも知れないが学生諸君で環境問題に興味のある方は私の本務機関である独立行政法人国立環境研究所を是非来訪されたい。研究実践の場を目の当たりにすることにより環境学に対する新たな意欲がわいてくることもあるだろう。

スポーツ栄養学から始まった素敵な出会い

体育学科
非常勤講師　寺田　雅子

私がスポーツ栄養学へ転身するきっかけは、京教大から出講依頼を頂いたことにあった。しかし、はじめは手探りであった。何しろ、スポーツ栄養学という領域が日本で認知されたのはせいぜい10数年前のことであるから、内容的にまだ不明なことが多かった。

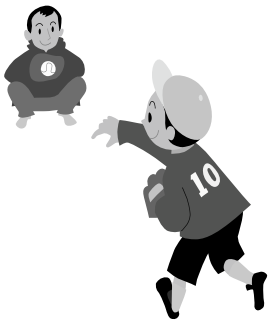
一般的な栄養学は健常状態を保つためのものである。病弱な人を健常に戻すには、本来，身体自身には健常に戻ろうとする営みがあるので、栄養がそれを助けてやればよい。一方、アスリートのような強健な体力づくりは、健常の上にさらに筋力を加えるのであるから、身体にとっても負担が大きい。したがってトレーニングや食事の特別な配慮を油断すると、元に戻ってしまう。そこで、健常の上にいかに効果的にプラスαして、それを維持していくかがスポーツ栄養学の課題なのである。

幸い当時、私はスポーツ紙で各種プロスポーツ選手たちの「食事診断」の連載を担当していたので、逆に彼らの実際の食生活を参考にしながら、プラスαの形成と維持の方法を考察し、理論付けすることを試みた。そうこうするうちに、タイガースの栄養指導を担当することになり、虎風荘や甲子園球場内のトレーニング室に出向く機会が増えていった。そこには、有名選手たちの、明るく、華のある素顔があった。彼らは自分の体力には細心の注意をはらい、食事に対する関心も高い。そこで得たのは、体力を作るのは丈夫な胃袋だという極めてシンプルな理論であった。厳しい練習に耐え、夏のロードでも体力を持ちこたえられる選手は、食事量が多い。多く食べると、自ずと摂取する食品の種類が多くなり、カロリーだけでなく栄養的充足もかなうのである。実際、昼間の選手食堂での彼らは、ほほえましいほどの食べっ振りを見せる。

さて、その彼らは甲子園球場の選手食堂で毎年、他人事の日本シリーズのTV中継を眺めていた。しかし去年は、彼らが日本シリーズの主役になったのである。でも、そこにもう一人のスターがいなかった。新庄選手である。3年半前の秋、シーズン終了時のオーバーホールにともなう栄養指導のため、甲子園球場のトレーニング室に出向いた折、私は新庄選手から細かい質問を受けた。おおらかな彼にしては珍しいことだと思い、できるだけ詳しく答えた。次いで私の方も質問した。「世間で、新庄さんの去就についてあれこれ騒いでいるけど、どうなさるの？」と聞くとニタッと笑って「ノーコメント」と返されてしまった。その数日後に、世間をアッと言わせたニューヨークメッツ入団の発表があったのである。

先年、私が、ニューヨーク・マンハッタンを相互ハイヤーで通りぬけている時に、運転手が「お客さん、この車は社長の車なのですよ。この車は新庄選手がメッツ時代にいつも乗っていたものです。社長が新庄ファンでね。早朝でも、夜遅くても社長が新庄選手を乗せて走っていたのですよ」。私は、彼が座っていたであろうシートに座っていたのである。急になつかしさを覚えたが、同時に、彼も異文化のなかで、毎日が一生懸命の繰り返しだったのだろうと思われた。

昨秋、虎風荘寮長の梅本氏が退職の折に、彼が駆けつけて花束を渡している姿がニュース放映された。彼を沢山のファンがとりかこんでいた。ファンにとっては、いつまでもタイガースの新庄なのであろう。シャイで茶目っ気たっぷり、そしてサービス精神旺盛の新庄選手、これからは北海道に、華やいだムードを届けてくれることだろう。



転職・転任教職員挨拶

定年退職を迎えるにあたって

産業技術科学科　手島　光司

昭和 62 年 4 月、産業技術科学科機械担当助教授として本学にお世話になって以来 17 年になります。採用が内定し、初めて本学を訪れたのは学年末試験が終わっていた頃で、学内は人もまばらで静かな雰囲気であったこと、案内していただいた教員が会う人毎に「こんにちは」と挨拶されることに学内の人間関係の暖かさを感じたこと、キャンパス内が整然としていたことが、前任校の本部キャンパスが当時余りにも無秩序であっただけに、強く印象に残っています。この 17 年間は、本学にとりましては激動の期間であったと思います。昭和 63 年には総合科学課程の設置、平成 2 年の大学院の設置、平成 4 年の大学設置基準の大綱化に伴う教育課程の改革、平成 9 年および 12 年の学部改組、そして来年度からの国立大学法人化です。大学院の設置につきましては、私が赴任しました年の夏（8 月 1 日だと記憶しています）、当時は 7 月初めに授業が終わっていて長期の夏休みに入っていたにも関わらず、臨時教授会が招集されて大学院設置に向けての体制が正式に決められたことが強く記憶に残っています。技術教育専修は 2 年遅れの平成 4 年のスタートでしたが、その間、環境教育実践センターの設置と産業技術科学科の教育課程の大幅改革、それに伴う人事などがあり、連日学科会議で激論を交わしたことも思い出されます。

教育・研究面では、科研費に加え、設備充実費や教育方法等改善経費等種々の学内申請経費を配分していただけたため、2 年目には自前の実験設備を持つことができ、その後の教育・研究に大いに役立てることができました。また、2 度も外国でまとまった期間研究に集中する機会をいただきました。これら全て教職員の方々の暖かいご理解と御協力・ご援助のおかげと感謝しています。平成 13 年度からは副学長を兼務し、入試、教務、および学生生活に関わる仕事をさせていただき、これまでお世話になったことへのお礼のつもりで働かせてもらいました。前任校も含めて大学教員としての経過を振り返って見ますと、随分と恵まれた環境であったことに今更ながら感謝しています。前任校で昭和 41 年に助手として採用されて本学に赴任するまでの 21 年間は研究に専念させていただき、本学でもその研究を続けながら教育に携わることができました。

法人化によって本学の在り方、従って教職員のありようや環境は変わって行くことでしょう。しかしながら、教職員一人一人が学生への教育と学問研究に対して持つ真摯な姿勢を保ち続けることができれば、必ずや大学の発展に繋がるものと信じています。

最後に、大学教員としての職務を恙なく過ごさせていただいたことに対して、教職員の皆様に深甚なる感謝の意を表します。

ああ しんどかった

理学科教授　生島　隆治

とうとう来るべき時が来てしまいました。縁あって本学に就任して以来丁度10年経ちました。10年一日と言いますが、あっという間でした。兎に角忙しい日々でした。今では、名前も顔も判らない教職員メンバーが急増し、激しい変化に戸惑いすら覚えます。特に国立大学法人化の流れにのり、競争だ、市場原理だ、効率だ、学長裁量だ、トップダウンだ、評価だと声高に叫ばれるにつれ、世代のズレを感じ、さらに、戦略だ、攻撃だ、統率力だとくると、生理的嫌悪感すら感じるようになりました。自覚は無くとも最早生きた化石と化しているのかもしれません。数年前からは、早く後進に道を譲れと囁かれ、心底そうすべきだと思いつつもチャンスを逸し、不本意ながら最後まで居着いてしまいました。去り難い思いが致しますが、丁度いい時期だとも言えます。生まれ育った京都の2大大学に身を置いて人生の大半を過ごせ、大変ハッピーでした。

本学での一日を「教育は心なり。愛なり。情熱なり。実践なり。感化力なり。」の自書を読むことから始めていました。多くの若者が慌ただしく通り過ぎていきました。他のことは忘却の彼方に消え去りましたが、修士論文や卒業論文を書き上げ研究室を巣立っていった約50名の若者達、学校・企業・公共機関で活躍する者、研究者として国際的な業績をあげつつある者、博士を目指して研鑽を積む者、子育てに励む者等々、どの顔もどの声も瞬時に思い浮かべることができます。彼らこそは私が本学で得た無二の成果です。また、2001年には、第5回国際染色体異常シンポジウムを開催でき、よい想い出になりました。

お世話になるばかりで何のお役にも立ちませんでしたが、何とか恙無く職務を全うできましたのは、偏に多くの皆様方の御指導・御鞭撻のお陰であると唯唯感謝あるのみです。心よりお礼申し上げます。21世紀に相応しく変身した本学が、民主的な運営により、益々、栄えることを心よりお祈り致します。

感謝

体育学科　野原　弘嗣

まずは、37年間という長い年月にわたりお世話になった皆様に今この紙面をお借りして心からの感謝を申し上げます。

私が助手として本学に採用されたのは1967年です。学部・専攻科時代からの恩師に包まれ、引き続いて学び続けたというのが実態です。体育学科には協調的な暖かさがあり、この伝統的雰囲気は今も変わっていません。本学の京都教育大学としての歴史とほぼ重なる長い年月、故郷に生きているように過ごさせていただきました。誠に幸せでした。

本学のことを「小さな総合大学」と表現されますが、あらゆる分野の専門家がおられます。体育学科の人間だったことから水泳訓練やソフトボール大会やスキー旅行、テニス、ハイキングなどを通じて他学科の先生方や事務官の方々との交流に恵まれました。そこから視野を広げることができました。また、教師だからこそもてる喜びを与えてくれた学生諸君にもお礼を言わねばなりません。ゼミ生諸君と一緒になって取り組む活動は私の活力源でした。陸上競技部の諸君が自己記録更新に挑戦する姿は私に青春を甦らせてくれました。諸君が示した努力、諸君の輝く瞳に感動をもらいました。

歳のめぐりから、記念事業に関わらせていただき、附属桃山小学校長、学生部長、附属教育実践総合センター長を経験させていただきました。これらの経験において先生方、担当職員、教授会委員の方々の真剣なご努力により役割を果たすことができました。皆さんと共有できた緊張と充実の時間をふりかえり、今あらためて感謝を申し上げます。

新年度から京都教育大学は新たな制度の大学として始動されますが、これを好機として一層の発展を遂げられると確信しています。皆様のご健康とご活躍を祈念いたします。

皆様ありがとうございました

家政科教授　加地　芳子

平成五年二月から十年余りお世話になりましたが、皆様には大変暖かくお付き合いいただき感謝しております。本学は、三つ目の職場であり、最後の職場となりますが、「終わり良ければ全て良し」の言葉通りに平穏な気持ちで、最後の節目を迎えることが出来ますことをありがたく存じております。過ぎてしまえば、短い十年間でしたが、皆様から多くを学ばせていただき、感謝の気持ちで一杯です。

時には議論が白熱してしまうこともありながら率直に意見交換ができた学科の先生方は言うに及ばず、種々の場面で多くの先生方にお世話になりました。一貫性を配慮したカリキュラムの組織化のために五附属の家庭科の先生方と続けた共同研究や、教科教育学の確立を目指しての教科教育や実践センターの先生方との研究会は、私自身の研究の視点を拡げる貴重な場であり、楽しく忘れがたいものがあります。また、四年間学校長を務めさせていただいた附属京都中学校では、教職員や生徒の皆さん・保護者の方々から、学校教育の魅力と奥深さ、そしてパワーをいただきました。更に、私の家庭科教育学への思いを我慢強く聞き一緒に議論して下さった修論生・卒論生や多くの受講生、そして、側面から暖かく支えていただいた事務職員の方々、本当にありがとうございました。

今後、独法化とともに一層厳しさが求められることでしょうが、自己規制を前提にすれば、伸びやかな暖かさこそが、各人の持ち味を発揮させることを確信しております。

最後に、皆様のご多幸とご健康を、そして独立法人・京都教育大学が永遠に不滅であることを祈念し、お礼の言葉といたします。

奉職40年を振り返って

教務課
専門職員　渡部　鐵太郎

私を知っている方は、びっくりされたと思いますがこの3月に定年退官することとなりました。昭和38年（1963年）8月京都大学に勤務して以来早や40年と8ヶ月経過しました。京都教育大学には、昭和52年（1977年）9月に会計課を皮切りに、附属高等学校、施設課、会計課、学生課、教務課と勤務して以来26年7ヶ月経過しました。

京都大学では学園紛争に巻き込まれ、本学では、「社会教育主事講習」を平成7・8年、平成13・14年と4年間携わり非常に多くの方々と巡り会いました。

社会教育主事講習は、真夏の暑い40日間を殆ど休まず毎日講義があり公私とも色々と世話をしたり、お世話になりました。また、平成12年度平成15年度の最後の4年間は、「社会教育主事講習」の他に「学校図書館司書教諭講習」、「京都府教育職員免許法認定講習」、「子どもふれあい教室」と夏休みに各行時が集中して夏休みが取れず非常に応えました。それでも、とにかくじっとしているのが苦手で、絶えず動いているのが好きで、椅子に座って字を書いたり考えたりするのがこれでやっと解放される喜びを感じております。（家庭でも「マグロ人間」と言われています。）「マグロ人間」とは、魚の「マグロ」は寝ているときでも泳いでいないと死んでしまうので、絶えず動き回っているということです。

趣味は、写真と登山、旅行で最近はほとんど行なっていませんが、写真では、10台ほどのカメラを持ち花、人物、石仏、風景、建物などが主な被写体です。登山は京都大学勤務の友人と6名で山岳クラブをつくり、北は利尻岳から東北の朝日連峰縦走、南は屋久島の宮之浦岳など日本全国の主な山に登りました。最近の趣味は、日曜大工と園芸で、今までにウッドデッキや勉強机、ベット、椅子等を作っています。

退職した4月は、2週間ほど北海道へ行き、帰ってからは春の花の植え付けや種まき、土つくり等があり、ゆっくりできませんが、これからも日曜大工を続け、最終的には古民家再生が夢です。

最後に、京都教育大学の事務の方々、先生方には大変お世話になりました。国立大学として最後の退職者となりましたが、4月からは独立行政法人ととして新たに出発する京都教育大学の発展をお祈りいたします。

定年を迎えて

附属養護学校
教務助手　小谷　卯一

私は、昭和 62 年 4 月国鉄が JR となるとき民営化反対の意思は変わらず、公的機関への転職を決意し、24 年間好きで勤めた国鉄新幹線を去り、京都教育大学付属養護学校教務助手の募集に応募した。43 歳の働き盛り，さあ、なんでもやるぞとの思いで、養護学校で働き始め 17 年の歳月が流れ、今、思い返すと、最初に養護学校の校門をくぐった時、別の世界を感じ、まるでムーミン谷のような、平和で優しくやわらかな香りがする、思いがしたことを思い出します。

養護学校の子供達はまるで天使、私自身の汚さ、愚かさ、世の中の醜さなどまるで縁の無い世界、こんな世界を創りあげる天使達に少しだけでも触れ合うことができた事で荒んでいた私の心は徐々におおらかになれたような気がします。

天使のような児童生徒から与えられたものの大きさに比べ、私は何ほどのこともできていないのではないかと不安に駆られながらも、今、長いマラソンを走り終え、何とか完走できたと言う思いで居りながらも、多くの教職員に多大な迷惑や心配をかけながら到達したのであって自らの力だけでは困難であっただろう、改めて感謝し、お礼申し上げます。

定年を迎えて、残りの人生、自由勝手に過ごしたいと思いながらも，天使達の味方でありつづけたい、何かお役にたちたいが、知力、体力共にゼロに近い状態、何か、しようと思う一方あまりにも無学故に手も足も出せない、ただ、気持ちだけしかないのが現状であり改善を図りたいと願いつつ、あわてず、ゆっくり、おおらかに、過ごしていきたいとおもっています。

転任の挨拶

産業技術科学科
教授　古谷　博史

振り返ってみると、京都教育大学にお世話になってもう 14 年になります。14 年前の 2 月 1 日に、当時の蜂須賀学長から辞令をいただいた時のことが、ついこの前のことのように思い出されますが、しかしもうこんなに年月が経つたのかと感慨深いものがあります。この年の卒業研究発表会に出席した時、ある先生に、卒業生のうち何人が教職に就くのでしょう、と質問したら、「教職に就くのはこのうちの半分くらいです。大変なんですよ。」というお返事で、それは大変ですね、と言ったことを思い出します。しかし、今から見るとこれはまだ良い方で、それから状況はさらに悪くなり、産業技術科学科の学生で教職に就く学生は 1、2 人という状態が普通になっていきました。それこそ、1 人でも 2 人でもいいから教職に就いてくれ、というのが当時の私たちの本音でした。こうした状態がそれこそ 10 年以上も続いたわけですが、最近になって漸く改善する兆しが見え始め、昨年は半数の学生が教職に就きました。この 10 数年は、大学の周りを寒風ばかりが吹き続けていたような気がしますが、ここにきてやっと暖かい風も吹き始めたようです。

私自身は、総合科学課程の情報担当の教官として着任したのですが、当時はまだ学生を受け入れて 2 年目で、いろいろな点で未決定なこと解決すべきことも多く、井本先生を中心に多くの方々が対応に苦労されていました。3 回生になった彼らに最初の講義を行った時、一番びっくりしたのはコンピュータを使えない学生が多かったことです。どうも非常勤の先生ばかりに教えてもらった結果、こういうことになったように思われました。しかしその後、佐竹先生、武政先生と新しい先生方が着任され、講義も専任の先生が担当するようになると、学生の様子が目に見えて良くなっていき、私もほっとした記憶があります。最近は以前とは異なり、総合科学課程には逆に厳しい風が吹くようになり、また法人化についても対応が迫られています。このような中で、これまでの経緯にとらわれず、新しい発想で進むべき道を見つけていって欲しいと思います。長い間ありがとうございました。

転任の御挨拶

数学科教授　小磯　深幸

京都教育大学では1996年4月より8年間過ごさせていただき、その間たくさんの貴重な経験をさせていただきました。中でも最も印象に残っていますのは、やはり、卒業研究の指導や授業を担当した学生達のことです。数学そのものに魅力を感じて勉強したい、しかもそれを将来の教員生活に役立てたいという学生達が大勢私の研究室に集まってくれまして、熱心に根気よく勉強し、場合によっては教員採用試験を数年間にわたって受け、最終的には希望どおりの教員に採用され活躍してくれていますことは、私の大きな喜びと誇りであり、私自身もまた真摯で純真な学生達から学ぶことが多かったと思っております。また、他学科の先生方と交流の機会を多く持つことができ、学問や教育に関する視野を広げることができましたことも、京都教育大学で得た私の貴重な財産です。各種委員会や学生の教育その他のことでお世話になりましたすべての先生方や事務の方々に感謝申し上げます。さらに、専門である微分幾何学の研究につきましては、約3年前に国際共同研究に着手し、研究費や海外出張、海外からの数学者の招聘等に関しまして、事務の方々に大変お世話になりました。有難うございました。おかげさまで、米国の数学者ベネット・パーマー氏との3年間にわたる共同研究により、新しい観点を得ると共に真に独創的な業績を上げることができました。それから、最後になりましたが、この8年間、教育、研究、大学運営等のすべてに関しまして御指導くださり、また、常に暖かく励ましてくださいました数学科の先生方に心より感謝申し上げます。

今後は、京都教育大学での貴重な体験を生かし、奈良女子大学におきまして、教育、研究に励んでいきたいと存じます。京都教育大学の御発展と教職員の皆様の御活躍をお祈り致しまして、転任の御挨拶とさせていただきます。

原稿募集！

皆さんからのご意見や投稿を広く募集いたします。とりわけ地域の皆さんや学生の皆さんからの投稿や企画等歓迎します。建設的なものであれば，紙面の許す限り掲載したいと思っておりますので，どんどん送って下さい。原稿等には締切期限を設けておりません。ただし，採用の可否は委員会で判断いたします。

【投稿要領】

○身近なできごと，ちょっとした発見，楽しかったこと等，テーマは自由です。
（テーマ例：研究室紹介・旅行記・趣味・体験談・提言等）

○写真・イラストも募集します。タイトルまたは説明文を付けて下さい。

○送付先

タイトル，氏名，連絡先を明記の上，下記へお送り下さい。電子メールでも構いません。

〒 612-8522
京都市伏見区深草藤森町 1 番地
京都教育大学総務課気付「地域交流・広報委員会」
E-mail：kouhou@kyokyo-u.ac.jp

第 113 号の読者の皆さまへ

kyokyo をお読みいただきありがとうございました。

読まれた記事のご感想や広報誌のあり方などのご意見を，お聞かせ下さいませんか？

あなたのご意見を，今後の企画・編集の参考にさせていただきたいと思いますので，上記の連絡先にお寄せ下さい。

113 号編集後記

京都教育大学

地域交流・広報委員会

委 員 長　小寺　正一（副学長，社会科学科）
副委員長　高乗　秀明（附属教育実践総合センター）
委　　員　寺田　光世（附属図書館長，体育学科）
窪田　敏志（事務局長）
石川　　誠（社会科学科）
宗雪　修三（国文学科）
芝原　寛泰（理学科）
堀内　　孜（附属京都小学校長，教育学科）
小竹　健一（附属養護学校副校長）
伊藤　伸一（産業技術科学科）
事務担当　総務課

京都教育大学広報 第113号

発行日
2004年3月25日

編集
地域交流・広報委員会

発行
京都教育大学
〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1
電話 075-644-8106
http://www.kyokyo-u.ac.jp